

南 吉 講 話

・新美南吉についての三つの講演・

石 川 勝 治

- 一、新美南吉出前授業
- 二、南吉遠望 九首
- 三、新美南吉に親しむ
- 四、南吉詩歌にみる安城の四季

一、新美南吉出前授業

(はしがき)

平成二十三年十一月二十八日(月)午前十時五十分・十一時三十分 安城市立桜町小学校の五年生約百二十名の児童への授業

桜町小学校では平成二十三年度・五年生の総合的な学習「南吉から、ぼくらへのメッセージ」(十五時間)におい

て少年童話を学び、その初めに『いぼ（疣）』を読んで登場人物の気持ちを読み取るうを進めていた。安城市中央図書館主催の「新美南吉出前授業」が十月から始まっていたので、学校から「新美南吉に親しむ会」の会員に少年童話の紹介をしてもらいたいとの依頼があった。そこで都築秀行氏が『久助君の話』と『川』について、続いて石川が『屁』と『嘘』について各々二十分の授業をした。そのとき筆者の話したままの原稿を次に載せることにする。

新美南吉の少年童話について

九月に大府へ孫の幼稚園の運動会を見に行きました。終つてから家に寄りますと、四年生の孫娘が『ごん狐』はもう習ったが、少しむづかしいと言っていました。みなさんは去年どのように思われましたか。数年前に中部小学校の四年生のみなさんと、南吉先生ゆかりの地であります桜町小学校をお訪ねしました。林教頭先生から『南吉のうた』の本をいただき、ごん狐の記念碑と校庭にあります楠の木の説明をしていただきました。

今年は『ごん狐』誕生八十年の年です。南吉先生の教え子の一人に大村博子さんと言う短歌のお上手な方がおられます。その歌集の中に、

「ごんぎつね」みづから語り教室に眼光りき南吉先生（二回読む）

というお歌^洋があります。大村さんは『良寛物語 手毬と鉢の子』と童話集『おぢいさんのランプ』の原稿の清書をして、南吉先生のお手伝いをされたお一人です。この童話集に『久助君の話』『川』『嘘』『うた時計』などの少年童話が入っていました。南吉先生はこの本の題名を初め『久助君の話』とするおつもりでした。『おぢいさんのランプ』のほかは、少年たちの話だからです。先生はこの本の「あとがき」^注で次のように書いておられます。

「この童話集は、まったく私一人の心から生れたものです。久助君、兵太郎君、徳一君、大作君達は、みんな私の

心の中の世界で生きているので、私の村にだってそんな少年達がじつさいにいるのではありません。(昭和十七年九月)このように読者に語られましたのは、今から七十年前のことです。しかし今でも分りやすいことが、南吉童話のよさでありましょう。

『屁』という少年童話は「ハルピン日日新聞」に載っただけでありまして、南吉先生が亡くなられました年に出ました二つの童話集にも入っておりません。しかし、みなさんにお渡ししてあります岩波文庫の『新美南吉童話集』の目次には『久助君の話』の次にこの『屁』が入っていますから、代表作の一つであります。それは次のような物語です。

春吉君のクラスに都会から来られた藤井先生が担任になりました。春吉君は藤井先生に秀才であることを認めてもらおうと読本の朗読をしますと、石太郎が屁をひつたのです。藤井先生は悲鳴を上げて窓をあけさせられました。クラスの中に屁こき名人の石太郎のいることが、春吉君にはたまりません。町の小学校との合同運動会でも石太郎はへまばかりします。それでも石太郎にはよいところがあります。学校の近くの土管にいたちがかけこみますと、藤井先生と二人で石太郎は真剣な顔をして腕を土管にさし入れてとらえました。とてもユーモアのあるところです。

南吉先生はこのような少年をどうして描かれたのでしょうか。初めに尼さんの是信さんと石太郎のことが出てきます。

石太郎が是信さんの屁弟子へでしであるという噂うわさが春吉君に、浄光院じやうくわんの書院窓しよいんまどの下の日溜ひたまりに仲好なつかく日向ひなたぼっここしている、是信さんと石太郎の姿を想像さくさせた注。

とあります。是信さんが石太郎をかわいがっておられるのは、母を早く亡しているからでしょう。父がどこかに稼かせぎに出ています貧しい家では、病気で寝たつきりのおじいさんと二人で暮らしています。石太郎はどじょうやうなぎを

とつて、おじいさんに食べさせたり、売ったりしている親孝行な少年です。このようなところから、南吉先生の心のあたたかさが伝わってきます。

そして物語は次のように終わります。

図工の時間にみんな粘土で思い思いの細工をしています。朝から腹工合の悪い春吉君は、音を立てずに屁をしてしまいました。藤井先生にだれだとなられて、教室中は屁騒動の犯人さがしになったのです。春吉君は「ぼくです」と正直に言えません。今まで自分は正しい人間だと思っていましたから、自分がいやになってしまいます。石太郎のせいにしていたことを反省しますが、生きていくにはこれも許されるのだと春吉君は思いました。このように少年の心の成長を描いた童話を書いたのは、南吉先生が初めであると言われています。

『嘘』も少年たちを描いた作品です。久助君のクラスに色の白い太郎左衛門が横浜から転校してきました。久助君はこの都会風の少年に心をひかれます。徳一君、加市君、音次郎君も同じような気持です。ところが、この太郎左衛門のために久助君たちはさんざんたまされてしまいます。五月の日曜日にみんなが退屈していますと、太郎左衛門は知多半島の新舞子の海岸で愛国号という飛行機が宙返りの曲芸を見せていると言います。そして久助君たちを連れて十二、三キロの道を歩かせました。常滑の大野の町をすぎて新舞子の海岸に着いたときには、もう太陽が西の海に入ろうとしています。五人はくたびれて脚をなげだしますと、飛行機がみられません。嘘だと分り、みんながっかりして泣き出していました。太郎左衛門は大野に親戚があるから、電車で送ってもらおうと言います。またたまされたのではとみんな不安になりますが、これだけは本当でした。時計屋のおじさんに連れられて電車で岩滑まで帰ってきます。「死ぬか生きるかというどたんばでは、あいつも嘘をいわなかった」（大全・四三）と久助君は安らかな気持ちになって、すうっとねむってしまいました。

南吉先生は童話集の「あとがき」で「言葉は少々君達にはむつかしいのがあるかも知れませんが、書いてあることからは、少年達の気持にしても、少年達のことにしても、君達によくわかり、面白いはずだと、私は自分でできめています。」とも語っておられます。この『おぢいさんのランプ』の本が出ましたとき、先生は安城高女の職員のみなさんにとりめしをふるまわれて、職員室にラジオを寄付されたとのことでありませぬ。

『うた時計』も岩波文庫の本に入っている名作です。冬の野道を一緒に歩きながら、十二、三の少年と三十代の男の人の交わす会話が、生き生きとして分りやすい童話です。少年の素直さが、父親の薬屋からオルゴール時計と懐中時計を持ち出してきた男の人の心を変えさせる話です。この作品は短くて分りやすいですから、少年童話はこれから読むのもよいでしょう。

南吉先生の少年童話は、少年たちの性格と心の変化を描いています。『ごん狐』や『おぢいさんのランプ』のような話のすじのおもしろい童話と様子が少しちがいます。『牛をつないだ樁の木』や『花のき村と盗人たち』のような大人の出でくる童話もお書きになりました。そして南吉先生は最後に『狐』と『小さい太郎の悲しみ』、さらに『疣』という作品で子どもたちの世界へ帰ってゆかれたのであります。

終りに南吉先生のお姿を伝えてくれますエピソードを二つお話ししましょう。

私がこの安城高校に昭和二十九年に入りました時の校長先生は荒井善男先生でした。荒井先生は南吉先生と一緒にこの安城高女で教えておられました。荒井先生のお話^{注4}によりますと、昭和十六年十二月八日に日本がアメリカと戦争を始めたとき、職員のみなさんは学校で飼っていたにわとりをつぶして、お祝いの食事をされました。そのとき南吉先生と一緒に食べられなかったのです。また学校の牛小屋で育てていた子牛がめへ首を突込んで死んだとき、職員のみなさんはその子牛の肉を分けておいしく食べられました。食料のとばしい時代でしたが、南吉先生はそ

の時も一緒に食べられませんでした。

昭和十六年十月に『良寛物語』が出ていましたが、その第二章で少年の良寛・栄蔵がお祝いの食料として鹿の子が殺されるのをひどく悲しむ場面があります。みなさんが学んでおられます『南吉のつた』には「にわとり」「や」「子牛」の歌など、生きものの童謡と詩がたくさんあります。南吉先生にとりまして生きものたちは、人と同じように大切な家族のような世界でありました。

『安城の新美南吉』という本には、教え子のみなさんの思い出がたくさん出ています。その中で四名の卒業生の方^{注5}が、学校の中央廊下にはり出された新美先生のお便りのことを書いておられます。その文は次のようなものでした。

皆さんと一緒にいった遠足は楽しかった。君達はやさしかったね。僕のポケットにキャラメルやチョコレートを入れてくれたね。とても嬉しかったよ。そんな君達に石頭だとかザル頭だとか悪口言ったり叱ったり悪かった許してくれたまえ^{注6}。

これが新美先生の五年間ここで教えになられましたみなさんへの最後のメッセージでありました。このお手紙がはり出されたのは昭和十八年四月十二日のことで、先生はもう二十日前にこの世を去っておられたのであります。日新堂の加藤干津子さんは一緒に遠足に行かれたお一人でありまして、今年も南吉先生のことを親しくお話ししてくださいました。

私のつたない話が、新美南吉先生のお姿を少しでもみなさんにお伝えできましたでしょうか。今日はありがとうございました。

〔注解〕

- 1 大村博子著『鳳凰山麓』不識書院、一九九七年、一三三頁。
- 2 『おぢいさんのランプ』新美南吉著、有光社、昭和十七年十月十日初版発行(三、五〇〇部)定価一円二十銭、二二三・二二五頁。(名著複刻日本児童文学館昭和四八年八月ほるぶ出版刊)
- 3 『新美南吉童話集』千葉俊二編、岩波文庫、一九九六年、第一刷発行(二〇一一年第十六刷発行)八二頁。
- 4 神谷幸之編著『南吉おぼえ書』全五集、財団法人かみや美術館、第2刷発行、一九九〇年、六五四頁。
- 5 『安城の新美南吉』編集新美南吉に親しむ会、一九九九年「第三章教え子の思い出」でアンケート「先生のこと覚えていることがありましたら、具体的に教えて下さい」に答えて、二十一回生の三名が次のような思い出を寄せている。(以下敬称略)水野澄子(旧姓川口)「昭和十八年四月十二日の私の日記に『今日、新美先生の手紙が学校に出していたのを見て涙が出た』と書いてありました。『もっこれでお目にかかれなにかと思うと淋しい』と書いてあります。』(七三頁)。桑嶋泰子「ご入院中生徒あてに手紙をくださいまして、中央廊下にはり出してあります、泣きながら読みました。』(同)伊吹典子「先生が学校へ出られなくなつてから、中央廊下に先生の手紙が張り出されたのを、みんなで泣きながら読みました。』(七六頁)さらに
- 6 『安城の新美南吉』の「卒業生からの手紙」の中で、二十二回生・横井てる子(旧姓杉浦)は次のように書いている。「勤勞奉仕に出て久し振りに学校へ行くと、先生の遺稿がビンで止めてありました(中央廊下)。苦しい息の下で書かれたか乱れたペンのあとでした。原稿用紙に書かれて居ました。』そして記憶から想起して貴重な手紙文を引用している(八七頁)。なお死に近い病床で思い出して書いたのは、昭和十四年四月十八日の日記にある「村積山へ遠足」であろう。(校定新美南吉全集第十二巻、七・十六頁)詳細な日記によると当日の行き帰りは、学校・明治川神社・矢作川・岩津・村積山(岡崎市奥山田町、学校から北東へ約二二キロ、標高二六二M。)で昼食・北野廃寺・新田・学校である。参加生徒は補習科、四年生、三年生、担任の二年生で、佐治校長、大村、鈴木、戸田、三田村の諸先生の名前もみられる。体調は悪くても、生徒たちとの楽

しい交わりが生き生きと描かれた記録になっている。

〔付記〕平成二十四年一月十四日に行われた「新美南吉に親しむ会」の新年会の席で、当時二年生（十九回生）の加藤千津子（旧姓山口）さんに、村積山への遠足では一年生のことには記されていないが、当日は全校生徒が参加したのかをおたずねしたところ、一年生も参加し、女性の先生方も引率されたとお答いただいたことを記しておく。

〔作品引用の略記〕本文中に「大全」と略記してページ数を記してあるのは、鳥越信編『新美南吉童話大全』（講談社）からの引用である。

（平成二十三年十一月二十八日）

二、南吉遠望 九首

佐世保での三十三年を終えて安城に帰り、平成十七年五月五日初めて半田を訪ねる。

自転車で長き橋越えわがこころ故里ハイマートもとめ岩滑に往きぬ

ででむしの詩碑中庭なかにわにありけれど廊下に見つむ白の痰壺

楠光る校庭出でて新田の宿への道を辿るひととき

『花のき村と盗人たち』の跡をたずねて

川沿いに尼寺ありて花の木の観音地藏わらじを履きぬ

南吉にゆかりある店壁かざる物語絵はいかに見るらん

新田の小川に螢光り飛び村の童と花火をあげぬ

上奈の藪を通りし南吉は日記に書きぬ藪の匂ひと

(昭和十七年六月二十八日)

託児所の奉仕につとむ教え子を浄玄寺へと訪ねゆきたり

(昭和十七年七月一日、浄玄寺は安城市上奈町にある真宗寺院)

鹿乘川はるかに見ゆる村積の山のすがたに南吉偲ぶ

(平成二十四年一月作)

三、新美南吉に親しむ

(平成十九年度安城市「桜井高齢者教室」における講演)

本日は九十分も時間をいただきまして感謝致します。安城ゆかりの新美南吉の一面でもお話できればと思います。初めに今日の話の要点を三つ上げておきます。一は南吉童話を読む安城の子どもたち。二は詩碑を中心に南吉詩歌に親しむ。三は新美南吉とこの近くに住んでおられた鈴木進先生のことです。資料に従ってみなさんに作品を読んでいただきますが、先ず『でんでんむしのかなしみ』を五名の方に朗読していただきますよう。(上略)このでんで

んむしは、もつ、なげくのをやめたのであります。」

この話は皇后美智子様がインドで行われましたご講演「子供の本を通しての平和^{注1}」の中でお話しになりましたから有名になりました。何度も記憶に甦^{よみがえ}って来て生きることには楽ではないと不安を感じながらも、この童話は決して嫌いではありませんでしたと申されました。そして本は子供に安定の根を与えてくれるし、どこまでも飛んでいける想像の翼も与えてくれると語られたのです。安城図書館協会が毎年発行している「貝^{注2}から」という子ども読書感想文集があります。第二号^{注3}（昭和四十三年十二月一日発行）から「新美南吉童話感想文コンクール」の授賞作品が数篇載っていますが、今年で四十号になりました。三十三号（平成十二年二月十九日発行）に西部小三年の守田智勇^{ちゆう}くんの「でんでんむしのかなしみ」の感想文がありますので、その主なところを読んでみます。

ぼくにはからはないけれど、体の中にはかなしみがいつぱいつまっています。今までで一番のかなしみは、一年生のとき、友だちが交通事故で死んでしまったことです。…そうしきでおわかれの花をあげるとき、かなしくてたまりませんでした。…こうして思い出してみると、かたつむりくとぼくは、いっしょなんじゃないかな、という気さえしてきます。…ぼくも、この本を読んでかなしみはだれでも持っていることを知りました。…だれでもこうしていると分かって、ちょっとほっとしてうれしくなりました。（点線部中略）

このように悲しい経験から話の主人公に同化できました。そこから生き方を学んで心の安定が得られたのです。人生の真実を知るのに年齢は関係がないとも言えましょう。三年生でも深く読んでおります。美智子様のご講演の結びには本を友として喜びと想像の強い翼を持って、痛みを伴う愛を知るようにとあります。そのよい成果を私たちは近くの堀内公園の駐車場フェンスに見ることができます。それは桜林小学校の六年生七十名が画いた卒業記念「絵本ごんぎつね」（平成十七年三月）です。文と八面の児童画から成っており、コの字形の長さは八十歩に及びます。先

日その文章を書き写してきましたから、少し長いですが読んでみましょう。

安城ヶ原に菜の花や大根の花が咲き乱れています。ノいたずらぎつねのくんは飛びはねたり寝ころんだりして友達と遊んでいます。ノいたずらぎつねのくんは兵十が病気のおつかあのためにとつたうなぎをにがしてしまいました。ノそのためにおつかあは亡くなってしまいました。ノそれでくんはおわびに毎日ぬすんだいわしや山でとつた山菜、松茸、栗を兵十の家に届けました。ノいわし売りにぬすんだと勘違いをされた兵十はなぐられてしまいました。ノある日兵十は家の中へ入って行くくんを見つけてまたいたずらにきたと思ひ鉄砲でうってしまいました。ノ青いけむりがまだつつ口から細く出ていました。ノ安城ヶ原に雪がふり一面銀世界が広がっています。くんの友達がふと夜空を見上げますとくんのたましいがキラキラかがやいていました。

今は日本中の四年生が『こんぎつね』を学んでいます。私たちは習いませんでした。それでも内容はよく分りましたでしょう。原作は作者の生れた半田の岩滑やなぐを舞台にして季節は秋です。『絵本「こんぎつね」』では安城ヶ原の春から冬までとなっていておもしろいところです。その間の話は童話の通りにうまく要約されています。春の野と一緒に遊んだくんが天国に行ってしまう、魂が星のように輝いているのを友達が雪の降る地上から見上げています。豊かな想像力による創作でありまして、ニクラスの子童たちの顔も画いてあります。そして結びの文が読めます。

ノ満足のできる作品となり、とてもうれしかったです。この作品がみんなの心に残りますように。

想像力の豊かさは「貝がら」の中にも見られます。作野小二年の吉田春田さんは「こんぎつね」(「貝がら21」)の初めに書きます。「かなしいお話でした。兵十の大すきなおかあさんがびょう気でしんでしまったのです。」そして次のように結びます。「兵十は、しんだおかあさんのよこにゴンのおはかもたてて、きれいなお花をかざってあげたと思います。」ひとりになった兵十の立場に立って先に逝ったふたりの平安を祈るのです。桜井小一年の大屋紀之くん

は「ごんくんへ」「貝がら²⁴」語りかけます。「ごんがひょうじゅうさんのてっぼうでうたれたとき、ぼくはしんぞうがとまりそうでした。ほんとうにしんじやったのかなとおもいました。ごんがほんとうにしんじやったから、ぼくは、かわいそうでかわいそうで、たまりませんでした。／＼ごんくん。てんごくでおかあさんとあえるといいね。」作品をよく読んで主人公の死を全身に受けとめて、「ひとりぼっちの小ぎつね」が母ぎつねと天国で再会できるようにと願います。そして今池小六年の内川珠樹くんも「天国のごんくん」貝がら³³」呼びかけます。

ごん、君は今、天国でどうしているんだい。…一生涯命な君を、ぼくは好きになったよ。…君は起き上がらない。永遠に君は生きかえらない。…「青いけむり」は、ぼくの心の中に、いつばいになって、ぼくを苦しめた。…南吉はなぜ、こんな悲劇的な結末にしたんだろう。…この結末は強いインパクトを、ぼくに与えた。南吉は愛らしい君の死をむだにするなど、ぼくに教えたんだ。ぼくたち人間は、誤解を乗りこえられず、戦争をしまつようだ。心の中の「ごん」を失って悲しんでいる人がたくさんいると思う。そんな人が減っていつてほしいと思う。ごん、君の死が平和に役立つことを祈るよ。(点線部中略)

君とぼくの親しい対話は教えられるところの多いものです。友として心の中に生きたごんの死を経験して戦争と平和を考えるようになります。こうして美智子様のご講演の最後のお言葉が思い合わされます。「やがて一人一人、私共全てのふるさとであるこの地球で平和の道具となっていくために^{注4}」

そのために子どもたちはどのような南吉童話を読んでいますでしょうか。「貝がら」四十号までの感想文は一九九篇あります。上位七位までの作品と授賞数は、一、「ごんぎつね」³⁹、二、「おじいさんのランブ」³⁰、三、「花のき村と盗人たち」²⁶、四、「手袋を買いに」²⁴、五、「牛をつないだ樁の木」²⁰、六、「百姓の足、坊さんの足」¹⁴、七、「うた時計」⁹となります。これから名作童話も知られます。安城市には小学校が二十一校、中学校が八校あります(平

成一九年度現在)。その中で桜井地区の小・中学校はどうかと思われましょう。上位七作品は市全体と同じですから省略します。授賞数は桜井小十、桜井小六、桜井中八の二四です。そのうち「貝がら19」は授賞者七名中の四名が、「同28」では五名中の三名が、「同34」は六名中の三名が入選しました。また桜井小の林和弥くんは五年、「百姓の足坊さんの足」(貝がら33)と六年、「おじいさんのランプ」(の二回選ばれました。(会場に「私の孫です」の声)これはほかにありません。

それでは南吉童話はどういうふうに読まれているのでしょうか。桜井小六年の幡本陽介くんは「希望のランプ」(「貝がら25」)で言います。

巳之助は…ランプという文明の利器を売りこんで、村人の生活を明るくしてやろうという希望のランプを胸に燃やしていた…それをぼくの胸の中にともし、新しい時代を作っていきたい。(「おじいさんのランプ」)

桜井小六年の岩間祐治くんも、「文明開化のかげに」(貝がら33)同じように考えます。「おじいさんの前向きな生き方は、ただすごいとしか言いようがない。ぼくはこんなおじいさんの生き方に見習いたい。」桜井小三年の杉浦めぐみさんは、「てぶくろを買いに」(「貝がら30」)なぜ子ぎつねだけに行かせるの、「と何回も読み返して次のように結びます。「わたしは、動物に、人間はこわいもの、人間は悪いものって思われたくないです。動物と人間がもっとなかよくなるようにしていきたいです。」「ここには深い知恵があります。みんな物語に生きる力を求めています。人間と動物の関係は南吉童話の主要なテーマです。桜井小一年の林修平くんも)「こんぎつね」「貝がら28」)「こんはどうして村の人や兵十がきらいなんだろう」と思っって何回も読みます。ひとりですべてさびしい自分を分ってほしかったが、すなおになかよくしてと言えなくて、いたずらばかりしたのだと思っようになっていきます。「兵十は、こんのことをすつとすつと忘れられないと思っ。ぼくは、こんのようになかよしいことにならないために、自分の気もちをすなおにいえ

る人になろうと思った。「ここでもやはり生き方を学んでいます。

桜井地区では「貝がら三号」(昭和四五・一・一九)で授賞しました桜井中三年の平岩玲子さんが最初でした(「ひいらぎの木の下で」注5、南吉の作品について)。母親が新美南吉から国語と英語を教えてもらったと言っていたと書いてあります。その頃の写真を見てなかなかハンサムだが、「何となくさみしそうな顔をしているように思える」とあります。そこから不幸な生い立ちを述べ、自伝的作品を読んで「愛情、やさしさ」とは何んだらうかと問うております。そして「貧乏」のことも考えた後に『花のき村と盗人たち』について次のように述べます。

盗人たちが小さな子供に信用されたことによって改心するというのが、読んでいてこちらも、かしらと手下のとぼけたようなことばをかわし合っている所や小さな子供のことを思うと、自然に心暖まってくるようだった。このようにユーモアを解して作品の肝所を押えた読みを示します。読み心えのある文に接しますと心が暖まってきます。

同じように桜井中三年の加藤貴子さんは、「貝がら20」)、苦勞の末、ついに井戸を掘った海蔵さんのことを書いています。海蔵さんは「みんなのどをつるおしているのを見ながらただにこにこしているだけです。」

この『牛をつないだ樅の木』は南吉が自分の死を覚悟して書いた作品だといわれています。ですから「わしは、もう思い残すことはないがや。こんな小さな仕事だが、人のためになることを残すことができたからのオ。」(笑)という海蔵さんの最後の言葉には、南吉の生涯の思いがこめられていたのかもしれない注6。

加藤さんは作品から身近にあるものと社会に眼を向けます。道、橋、電柱、外灯、どれも無名の人達が汗水たらして作ってくれたものです。その人達に報いるためにも、ものを粗末に扱えないと思います。「これからも、無数の海蔵さんが生き続けることでしょう。」それで社会は支えられていきます。「自分を犠牲にしても、人のために尽くす。

もしかしたらこれが人間の真の姿なのかもしれません。私は海蔵さんからそのことを学びました。」と結ばれていきます。

「貝がら」を読んできますと、子どもたちの素直で清らかな心に直にふれることができます。安城時代の童話論で童話の読者は「相手は子供であって文学青年ではない^{注7}」と語られた真意も少しは理解されましよう。子どもの文章を読んでいて気付きますのは、南吉童話のもつ教育力です。それがいつまでも読みつがれていく魅力の隠れた秘密のように思われてきます。

次に南吉詩歌を読みましよう。「新美南吉年譜^{注8}」をみますと昭和六年に母校の小学校で代用教員をしております。そのとき「赤い鳥」に童謡「窓」と「ひかる」が入選しました。「ひかる」には「せんせいのかほひかるんだ。／にこ／としてひかるんだ。」とあり、明るい青年教師の姿を反映しています(全集八・一五)。昭和七年東京に出て「鳥」が北原白秋選で特選になりますが(十二月号)、これは『日本童謡集^{注9}』にも入っている名詩です。5の参考「童謡・詩・短歌・俳句^{注10}」にありますから、お二人で読んでください。「鳥で或るあさ、／鯨がとれた。／(略)鳥は、小さな、／まずしい村だ。」七音十二行で簡潔に一頭の鯨を使いきる島の人々の生活が歌われています。「赤い鳥」に最後に載った^{注11}「光」(昭和八年四月号)の終りには「人は光りのなかにある。／神も光のなかにある。」とありまして、宗教的な安らぎをも与えてくれます。それでは「新美南吉文学散歩と文学碑」の半田から河和までを一作品ずつ朗読していただきますましよう。ついでに文学散歩地図^{注12}も見てください。

5

「新美南吉文学散歩と文学碑」

(半田市)

南吉生家(生い立ちの地碑、句碑、常夜燈)

冬ばれや大丸煎餅屋根に干す(昭和十三年一月二七日)(昭和六二年三月建)

岩滑小学校(「権狐」の文学碑(昭和六十年三月建)と「落葉」の詩碑(平成九年六月建))

落葉

私ガ烏臼ノ下ヲノユクトノ金貨デモクレルヤウニノ黄イ葉ヲ二枚ノ落シテヨコスノ

サテ私ハノコノ金貨デノ手套ヲ一揃買ツテノ懐シイ童話ノ狐ニノ持ツテツテアゲヨウ(昭和十三年九月二十八日)

南吉養家(昭和四十八年三月二十二日(南吉三十回忌)に修復の完成式と「墓碑銘」の最初三行の詩碑)

墓碑銘

この石の上を過ぎる

小鳥達よ、

しばしここに翼をやすめよ

この石の下に眠っているのは、お前達の仲間の一人だ。何かの間違ひで、人間に生まれてしまつたけれど、(彼は一生それを悔いてゐた) / 魂はお前達とちつとも異らなかつた。 / 何故なら彼は人間のあるところより、お前達のある樹の下を愛した……(昭和十年八月三一日)

雁宿公園の南吉顕彰碑(昭和三十六年十二月建)

貝殻

かなしいときは

貝殻鳴らそ。

二つ合せて息吹をこめて。

静かに鳴らそ、

貝がらを。

誰もその音をノきかずとも、ノ風にかなしく消ゆるとも、ノせめてじぶんをノあたためん。//静かに鳴らそノ貝殻を。(昭和九年十二月二十二日)

半田高校(昭和四年三月二日の日記)(昭和五十六年三月建)

余の作品は、余の天性、性質と大きな理想を含んでいる。だから、これから多くの歴史が展開されて行つて、今から何百何千年後でも、若し余の作品が、認められるなら、余は、其処に再び生きる事が出来る。此の点に於いて余は実に幸福と云える。

(知多郡美浜町)

河和海岸の観光センター前(昭和五十年八月建)

少女細く海の碧るり泳ぎけり

河和小学校(昭和五十四年一月建)

石何年苔蒸し清水しみわたり(直筆)(昭和十一年一月二四日)



黒鍬街道 正面奥は新美南吉の生家
『知多の歴史』松籙社より転載

に従事したと伝えられています^{注15}。

矢勝川の土手に彼岸花を植えてこられた小栗大造さんの『歌綴・南吉と岩滑』からは地域の習俗が学べます。『くちん狐』にある「おねんぶつ」は「およりさん」と言われて、次のように歌われています。「多蔵さんの替りに南吉ちよくちよくとおよりさん参りの座につきてをり」「南吉の耳かたむける昔はなし世間はなしの年寄りの声^{注16}」これを読むと経験から創作へと向う作者が知られてきます。それは草稿『権狐』（一九三一・一〇・四）にある次の文章でリアルに描かれています。

半田の文学碑を訪ねるには河和線の半田口を目指します。踏み切りを越えて右に曲ると、生家の西側に立つ「新美南吉生い立ちの地」碑の前に出ます。岩滑の「南吉碑を建てる会」の有志によるものですが（昭和四十一年十月）、光蓮寺の本多忠孝^{ちかたか}氏が二十三回忌（昭和四十年）の席で発案されました^{注13}。生家東脇に「冬ばれや」の句碑があります。年譜に四歳で（大正六年）「母子、病没、隣家の森はやみに子守りしてもらう」とありますが、森家は生家南の煎餅家の近くでした。生い立ちの地が南吉臨終の場所でもあるとの証言もあります^{注14}。生家を復元して文化財とした半田市は、いつでも無料で見学できるようにしました（昭和六十二年四月）。そして生家の横には「黒鍬街道」が大野に通じておりまして、農閑期に知多の人たちは鍬一丁かついで土木工事

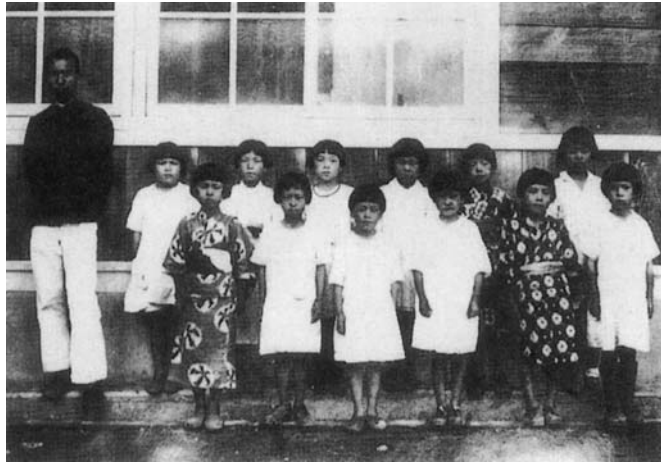


南吉に数多くの民話を語り、いつも健康を気にかけてくれた優しいしゑ夫人。

権狐はお念佛がすむまで、井戸の側にしやがんであました。お念佛がすむと、また、兵十と加助は一緒になつて、歸つて行きました。権狐は、二人の話をきかうと思つて、ついて行きました。兵十の影法師をふむで行きました。(全集十・六五五)

月夜の晩に「こん狐は中山様のお城の下で二人の百姓に出会います。そして吉兵工の家で営まれる「お念佛」の行き歸りに二人が交わす話をうしろから聞いています。それはおよりさん参りをして古老たちの昔話に耳を傾けた正八少年の姿と重なります。草稿の初めにも「私が、次にお話するのは、(略)茂助爺から聞いた話なんです。」(全集十・六四九)とあります。民話風童話を作るには伝承をよく聞くことです。

小栗さんの親友・中山文夫氏は中山様の子孫で、「私の『こんぎつね』^{注17}」と「私の南吉覚え書^{注18}」からも童話の成立について教えられます^{注19}。中山家が「大興寺村(現・知多市大興寺町)」から岩滑に移つたのは昭和二年で、次の年から中学三年の南吉は親しく来るようになります。博学なしゑ夫人から岩滑村の周囲に伝わる狐や狸の昔話を「根ほり葉ほり」聞きました^{注20}。夫人の得意なものは都の流人に機を織つて恩を返した「葛の葉^{注21}」の狐女房の民話です。大興寺村に伝わる「大福寺の狐^{注22}」の話も南吉は「何べんも何べんも聞きました。」さらに『「こん狐」の初めにある「はりぎり綱」については、岩滑新田の同級生・都築栄男氏に尋ねています^{注23}。岩滑小学校の東門を入ると大きな烏臼の下に「落葉」の詩がひ



▲子どもたちと南吉(昭6)「例祭に子供達と神様に行つた。みちみち子供に名をきいておぼえて行つた」(4月6日)南吉は、次第に生徒達と親しみ、頼ずりしたくなるような女生徒がいてその気持を他の生徒が感づいているのを発見したり、好きな生徒の家庭を調べて失望するなど、生徒の行動や心理の動きを含めて日記に書きつける。教育者と同時に作家の目が働くのである。こうして師範学校不合格の心の傷みは癒されていく。

『新美南吉の世界』(蒼丘書林、昭和62年)

らがなで刻まれた詩碑があります。校庭の奥に「狐」の顕彰碑が建っていますが、文字は草稿権狐に依ります。この半田第二尋常小学校に南吉は昭和六年四月から八月末まで勤めました。(全校六組生徒数二七六名、職員九名。担任は二年生で男子三六名、女子二三名。月給二八円)。その間に童話を児童に話したり、聞き書きによる『グリム童話集^{注24}』も読んでいます。それは『代用教員の日記』(全集十・五〇四・二三)と当時の児童の回想から知られます。小栗さんの『南吉のやなべ^外』には二年生のひとり津波麻那(現姓・鷲巢)さんの短歌が五首ありますが^{注25}、そのうち二首は次の通りです。

春四月朝礼台に直立し、二年生担任新美正八です」
 雨の日の体操見習いいいきいきと先生自作の物語りする

緊張して挨拶した始業式から自作童話を語るようになるまでの姿がユーモラスに歌われています。その前後を時の流れにそって日記に読んでみましょう。四月一日は記念写真を撮り、竹内校長と各教室に挨拶に行きます。一日の終りに、「子供達が何か話をきかしてくれと云った。梅指トムの話をしよつた。」(五〇六、点線筆者、以下同じ)、四

月八日「石川啄木全集とグリム童話集を月末に勘定する筈で同盟書林からかつた^{注26}」(五一二)、十日「だんだん子供は自分になつてきた。(略)吉田弦次郎の童話『鐘と沈んだ丸』の話をきかせてやつた。彼等はだいたいぶ動いたらしかつた。」(五一二・一三)。十一日は学校の南の高山へ子供をつれて行く。四月十七日の日記より。

づつと前に作つた創作童話「大男の話」を子供にしてやつた。ひそひそと泣く子があつた。私はうれしくなつた。私の頭が作りあげた話が、子供の美しい涙に價することが^{注27}(五一六)。

巨男が生命を犠牲にして魔女の母親によつて白鳥に変えられた王女をその涙で人間にかえしてやる話です。その悲しさに子供たちは涙を流しました。五月一日「私は啄木の歌を讀んでる時は啄木風の歌をつくる。(略)そして、グリム童話をよんでるから、グリム風の童話をつくらうとしてゐる。模倣性はかりなんだかな。創造性にかけてるだけな。」(五二三・二四)。七月二四日は新資料から。

私はこんやはとまり番です。明日は一学期の終の日なんです。(略)私はもう私の教へてる子供達と別れなければならぬ(略)私は本をひらきました。けれど、私はちつとも読めないんです。だつて、今までの事が、いろいろ私の頭にうかんでくるんだもの。(略)私がピアノを弾いてゐたら、良子と曰出が、私のあこひげを見て笑つた事。私がブレーメンの楽隊の話をきかせてやつたら子供達が、大へんよろこんだこと。いろいろ、私が教へて来た子供についての思出がうかんで来ます^{注28}。(これはグリム童話の『ブレーメンのおかかえ楽隊^{注29}』である。四匹の老いて役に立たなくなつた動物たちが口バの発案でブレーメンへ行つておかかえ音楽師になろうとする。狩り犬、老い猫、おんどりは、途中で晩になり森の中であかりのついている強盗たちの家を見つけ、彼らを追い出して気に入りの家から出ていこうとしなくなる。)

このように南吉は他作自作を問わず童話を話し聞かせるのが常でした。それを当時の児童たちはどのように聞いて

いたかを二人の証言に聞いてみましょう。田中よしゑさんの回想より。

南吉先生は私の一級下の二年生を担任なさって、直接には教えてはいただいていないのですが、体操の時間に雨が降った時だけ二年生と三年生の二組が一緒になつて、大きな教室で先生のおとき話を聞きました。そのおとき話の楽しかったこと、牛やきつねが出てきたり、もうゼスチャたつぷりで、体操の時間があると「雨が降れば良いな」と子供心に祈ってました。(略) 当時は年に一回くらい専門のお話しの先生が学校に来られて、おとき話をなさったのですが、その専門の方より先生の方がお上手でした。そのお話が自作自演だったことは後でわかったのですが、作品として発表された年代とちがうので、きつとあたためてみえたのでしよう。(略) 先生はいつも黒いつめ衿の服を着てみました。他の先生はぼやけてはつきりしないのに、短いおとき話をきかせてもらっただけなのに、先生のことは、身ぶり手ぶりまでまざまざと思ひ出します注30。(点線部筆者)

この談話は代用教員時代の南吉を生き生きと語っています。きつねの出てくる話をあたためていたというのが肝心なところです。雨の降る体操の時間は正規の授業時間ではないのです。その時を活用して「ゼスチャたつぷり」に語つたのは、次に引く榊原二象氏の『「こんぎつね」の思ひ出など』にも共通しています。

私が「こんぎつね」の話を直接先生から話して戴いたのは、尋常六年生で確か昭和六年の初夏の、雨の降つてゐる体操の時間であつた。赤い鳥への発表が昭和七年一月号であるから、その頃の先生の自信のほどがしのばれる。どんなすじであつたかも忘れてしまつて、ただ最後の「青い煙が、まだつつ口からほそくでていました」という結びのところを、例の丸い目をさらにまん丸くして、口をとんがらし、両手で煙の上がるさまを手真似して、声を落して話を結ばれたあの強烈な感銘が、三十年近い今日もはつきりと頭の中に残つてゐる注31。

この証言は田中さんの聞かれた作者のあたためていたおとき話の自作自演と重なります。これからワル(原)『權

狐』は昭和六年の初夏にはできていたと言えましょう^{注30}。それは東京外語時代に南吉と親しくなった河合弘氏の語る次の文章からも知られます。

彼は、これから書くこととする童話の筋を話すが常であった。それは、たんに筋というよりも物語ぜんぶを詳しく熱心に話すのである。ちょうど、オーケストラのコンダクターが、これから指揮しようとする曲目のスコアを暗誦するよう^{注30}に注³⁰。

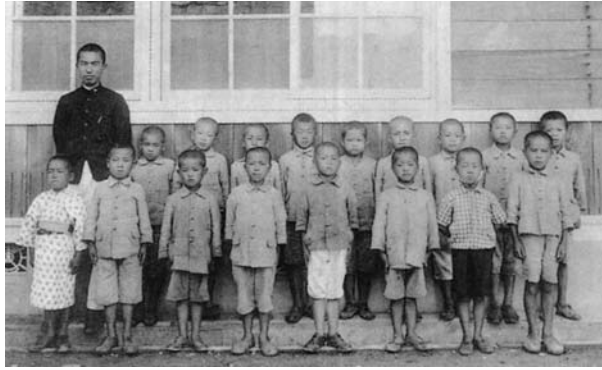
これは南吉の童話の作り方をみことに言い当てています。『こん狐』も作品として世に出る前に、作者は子どもたち「物語ぜんぶを詳しく熱心に話」して聞かせたのです。「權狐は背戸川の堤まで来ました。」(全集十、六五〇)とか「權狐は、お墓へ行って六地藏さんのかげに隠れておました。」(同、六五五)といった風景は岩滑の児童たちには親しいものであったでしょう。

岩滑小学校から南吉養家へ行く途中の左側に平成六年六月五日に開館した新美南吉記念館と童話の森があります^{注34}。中山様の城跡にある森の登り口に『手袋を買ひに』の親子像が見られます(平成六年五月建)。童話の森には南吉文学に登場する二十三種の植物が植えられています。森を登りますと丘の広場に『權狐』の草稿の刻まれた文学碑もあります(平成六年十月建)。さらに記念館の前庭には南吉生誕九十年を記念して『デンデンムシノ カナシミ』の原稿一頁が刻まれた碑も建てられています(平成十五年七月建)。このようにここでは南吉童話の代表作の自筆による文学碑が見られることを補っておきましょう。

今年(平成十九年)の七月に記念館で特別展「我がヴィナス 初恋の女性 木本成子と新美南吉」を見ることができました^{注35}。展示された資料の中に親友の河合弘氏に宛てて失恋の悲しみを綴った葉書^{注36}を見出した時の衝撃が忘れられません。その文面は「河合 ぼくはやぶれかぶれの無茶苦茶だ やぼつたくれの昨日と今日だ 雨だ 雨だ」

とあります。相思相愛であった女と別れた時の絶望の深さが知られましよう。この葉書が出されたのは、養家の詩碑になる「墓碑銘」が作られる二週間前のことです。（同じ昭和十年八月三一日に詩「去りゆく人に」と童話『鴛鴦』が帰省中の岩滑で執筆された。木本家と遠藤家は南吉生家に近い岩滑地区内にある。）

この年の五月に『デンデンムシノカナシミ』は制作されていました。雁宿公園の文学碑「貝殻」は前年の十二月



代用教員時代の南吉（前列右から2人目が咸子の弟の崇さん）



養子先北の矢勝川。
兵重がいつもはりきり網をしかけたところ



岩滑の墓地にあった六地藏

中と下の二葉は『南吉のふるさと』（発行半田市立博物館）より転載



小学校教員時代の成子

二十二日に書かれましたが、同じ日に作られた「葬式」の第三連には次のようにあります。「小鳥よ、空から下りてこい。ノ・光よ、ここまで射してこい。ノ・ここに、こどもがねむってる。」このモチーフが「墓碑銘」に発展します。創作の背景は昭和十年三月二十五日の遠藤峯好氏訪問記の日記から知られる。「冬休みに、a aが峯好君と結婚するといふ噂をきいた時、味つた苦しさを思つた」(全集十一・三九)とあり、この時が「貝殻」と「葬式」の制作に重なります。そして初恋の女性を断念した理由は次のようです。

僕は例の心の複雑なこと^{注37}を根據にしてなるべくa aが他家へいつてくれた方がお互のために幸福であるといつた。すると峯好君は急にまじめになつて、あなたは結婚してやる意志はないのかときつてきた。(同・四一)
ここに運命の岐路がありました。その苦悩を南吉はどのように解決したのでしょうか。三月二八、二九日に中学時代の同級生の松井榮一氏を訪ねて次のような対話をしています。

ゲーテは一つの作品でそれまでの自己を清算したといふ。(松)つきつめて死にたいと思つた時、遺書を書いて見ると一時氣持ちは救はれるものだ。(私)(同・四一)

このように創作による感情の浄化が、半田の文学碑の中心を成しています。「貝殻」と「墓碑銘」の詩作の動機です。これに『デンデンムシノ カナシミ』を加えると心の闇が南吉文学の原点にあります。しかし詩の「詩人」には「闇黒の中にノ一点の光を見つけると」という詩趣が歌われていますように、それが詩作の常に目差すところでした。

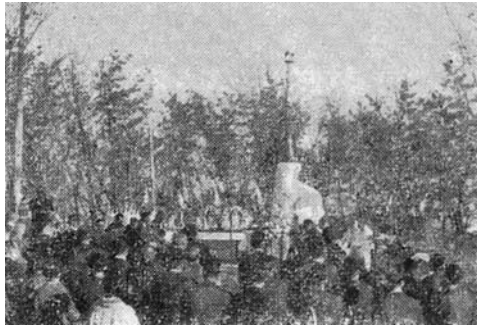
私たちは南吉詩に親しむ初めに三篇の童謡をみましたが、それは明るい光の世界です。童謡は他者へ語りかける言

葉から成っております。ところが「貝殻」では「誰もその音をノきかずとも」とありますように、詩人は自分自身に語りかけています。つまり詩人内部の独白です。そして「墓碑銘」では「この石の下に眠っているのは、/お前達の仲間の一人だ」とありますから、詩人は自分の墓に刻む詩を書いたのです。この長い詩には人間の「憎しみと詐りの言葉」と小鳥たちの「よろこびと悲しみの純粋な言葉」とが対比されています。後者こそ詩本来の言葉ですが、現実の冷たい風が詩人の「青い小さなロマンの灯」を消そうとします。そのために「自分でそれをふつと吹き消し、/彼は或る日死んでしまつた」とあるように、詩人の死を歌う深刻な危機であります。この詩の初めて詩人は小鳥たちの仲間の一人だと歌いましたように、同じ日に制作された童話『鴛鴦』^{あしひら}の終りでも愛し合う二人は鳥に変身して愛を成就します。

二羽のこの美しい小鳥はお互いに心いつばいに愛の喜びを感じているとみえて、小さい二つの尾羽^{おぼね}はきそうようにふられていた。(大全・七四)

南吉は創作によって心を救おうとしたのです。しかし詩人の伝記を知らなくても、「貝殻」と『デンデンムシノカナシミ』³⁹が、人はだれでも悲哀を心に抱きながら生きていることを表現していることに打たれます。「貝殻」の「文学碑除幕式の日に」(昭和三十六年十二月十一日)半田中学の同級生久米常民氏^{注38}は次のように語りました。

君は若くして死んだ。しかし君の文学は、今や、この顕彰碑とともに、不滅である。そして、この碑の上のランプが、人々の心に温かい、和らぎの灯をとますように、輝くだろうからだ。(中略)君の顕彰はよろこばしい。しかしそれは、外からのかけ声で行われるものでありたくない。かくれた作品を、一つでも多く世に出し、それが静かに読まれることによって、君の文学が人々の心の中に、ほんとうに温かい灯をとましてくれるような、そういう地味な努力でありたいということなのである。^{注39}



南吉の文学碑除幕式
「新美南吉研究」アリス館より転載

久米と一緒に学んだ半田中学(現・半田高校)の正門左側に庭園があります。小径を行くと池の中に立つ若人像の奥の松林に「中学三年の日記碑」が見られます。ここに来て南吉が母校でいかに重じられているかが知られましょう。

南吉は昭和十一年三月に東京外語を卒業して東京土産品協会に勤めましたが、十月に二回目の咯血をして小康を得てから十一月に帰郷します。それは「病氣と失業と失恋と」の状態でありまして短篇「帰郷」には次のようにあります。

彼は久しぶりに見る村はなつかしくもあつた。併し病に^{なま}仆れ、希望と職を失つて帰つて来た自分を村人に見られることを恐れてもいた。父母のそばに来られたので心はいつの間にか安じていた^{注40}。

この直後から連作俳句「病中戯吟」が制作されました(全集八の俳句番号9・67、十一年十一月二十四日から十二月九日)。その中に河和小学校の句碑の「石何年」はありますが、その前後の二句と共に読んでみましよう。

南 吉

腰おろす石のぬくみやよき、波れ
石何年苔蒸し清水しみわたり
ランパツけ 耳をすまやや鶴の声

ここには生家に帰つて病を養いながら、自分のいのちの声に聴き入っている作者がいます。「石何年苔蒸し清水しみわたり」とシ音のくり返しは心の静かな調べを表しています。それは芭蕉名句の音調と似ていましよう。

注41

立石寺 … 岸をめぐり、岩を^は這^ひて、^ぶつ^かく^くを^まを^り、^かけ^いし^やく^まく^くとして心すみ行のみおぼゆ。

閉ざや岩にしみ入蟬の声^{注42}

連作俳句を作るうちに南吉の心も澄みまして十二月九日には「病癒ゆ」とあり、「門前に貝踏み得たり今朝の春」の句に到ります。そして昭和十二年四月から七月まで河和第一尋常小学校の代用教員を務めまして（四年生六四人の担任と高等科の英語を担当、月給三十五円）、二年生担任の山田梅子さんと親しく交際しました^{注43}。九月から杉治商会烏根山畜禽研究所に住み込みで勤めます（月給二十円手取り十六円）。九月二日の山田さん宛の手紙には次のようにあります。

山はじつに空気がよい。湧き出したばかりの清水のやうに清澄である。僕らは緬羊や七面鳥や豚や牛や鶏などと一しよにこの美しい空氣の中で天地のめぐみを受取る。（全集十一・四四五）

「清水しみわたり」の心で仕事を始めて十月九日の日記には「病ひに仆れて恰度一週年^{ヌイ}、かへりみて今日の仕合せを喜ぶ。」（全集十一・二七五）とあります。これは足るを知ることですが、年譜には「このころが南吉生涯の苦闘時代」とあります。しかし異聖歌氏は次のように書きました。「彼のこの間の苦闘録を高く買っている。（略）病氣帰郷らしい女学校就職までの二冊のメモは、彼の最高の文学になっている^{注44}。」そのころ半田中学の恩師遠藤慎一先生夫妻が心配して烏根山に南吉を訪ねています。

そこで私は新美に、えらいところに来たなあ、と言ったら新美が、まあ、やっているには、やっているだが、困るのは食べ物だ。まあ、兎に角、朝、昼、晩、ろくなものしか食べられんで、本当に困っている。沢庵と味噌汁位のもんだ、と言ったのが、今でも印象に残っています^{注45}。

遠藤先生は可哀相だと思われて半田中学の同僚で昭和十二年度から安城高女の校長になっていた佐治克己先生と相談されました。両先生のはからいで教員免許状（英語）が取れて（昭和十三年三月十七日）四月から恩師の元で勤め

ます(月給七十円)。こうしてまた「冬ばれや大丸煎餅屋根に干す」の句碑に戻って来ます。この前の二句も「冬ばれや松葉に光る蜘蛛のいと」「冬ばれや羽光らせてとぶ雀」とありまして、光の世界に帰っています。これは安定した職に就けた南吉の明るい心を反映していきましょう。

それでは安城市の詩碑と「学校行事点描」からの詩歌を一作品ずつお読みください。説明文もお願いします。『南吉画帖』^{注46}からコヒーを作ってきましたから、回して先生方の遊び心を楽しんでみましょう。貴博は鈴木進先生、夜光虫は大村重由先生、赤鷲と耳鳴は南吉のペンネームです。

(安城市)

安城高等学校でむし詩碑(昭和二十三年十一月建)

一年詩集の序

生れいでてノ舞^アふ蝸牛^{カタツムリ}のノ觸角^{ツツノ}のごとノしづくの音にノ驚かむノ風の光にノほめくべしノ花も匂はゞノ酔ひしれむ(昭和十四年二月一日)

安城公園「文学の散歩道」牛の詩碑(昭和四十七年建)

牛は重いものを曳くのでノ首を垂れて歩くノ牛は重いものを曳くのでノ地びたを睨んで歩く(昭和十四年二月十三日)

安城中部小学校「貝殻」の詩碑(平成元年建)

桜町小学校「南吉のうた碑」(平成五年十月建)

新田小学校「百姓家」詩碑(南吉生誕八十周年と東海三県学校図書館奨励賞総合優秀賞記念、平成五年一月建)全三十一行の最初の八行

おきよよ この百姓家からノもれてくるハモニカ^{ハモニカ}の聲をノ誰かが風呂^{風呂}にはいりながらノハモニカを吹いているのだノほら、湯氣^{湯気}にくもつた硝子窓^{硝子窓}にノ小さいカンテラ^{カンテラ}の灯が見えるだらうノあの灯の下でちやぶちやぶやりながらノ吹いてあるのだ(昭和十七年十月五日)

この詩と「梨」の詩は、現在制作年月日の判明している詩の中では、最後のものである。「梨」の前半には次のようにある。
小川の底を、ノ梨がころがつてきた。ノ吉沢梨園からか、ノもつと川上の今村あたりの梨畑からか、ノ螟虫駆除につかれ
て、ノ小さいどんどのそばに踞かかんでいると、ノ冷たい水の底を、ノ丸いのがころがつてきた。ノころころところがつて、
ノ海の方へいつてしまった。(『墓碑銘』より)

「学校行事点描」から

関東修学旅行（東京、日光、善光寺）昭和十三年五月十日〜十六日、安城高女四年生、引率教員（大村重由、鈴木進、新美
正八）画帖「三人道中」より

うぐひすの声のまるゝやげこん瀧 赤鷲

湖の上にそびゆる白根山 貴博

月清しここ日光の宿に居て

すべてのものを涙ぐみつつ 貴博

「滝山寺自転車行」昭和十三年八月十五日、二年生約二十名と、教職員四名（校長佐治克己、教頭大村重由、鈴木進と南吉）
の吟行会。岡崎公園・伊賀八幡・大樹寺・滝山寺へ。滝山寺に三時間ほどいる。南吉の短歌より

かけ渡す矢作の川の高橋を少女らがわたれば裳ぞひるがへる//玉裳なす噴上げ水のかぎるひのおりつくなべに白鳥しらとりの一つ
//ゆきゆきて瀧山寺につきにけり樹山をこめてとよもす水音//岩山いわやまのたかみに立て八風渡る三河八やちこ八山國らしも

富士登山、昭和十四年七月二十一日〜二十三日、生徒四年生三十三名、職員三名（大村重由、鈴木進、南吉）と父兄二名、
画帖「六根晴天」より

かなかなや瀧を見にゆく徑のかど 耳鳴

魚の目を剪る旅やかた雲高 夜光虫

山酔や一瞬にして砂を嘔む 貴博

でむし詩碑が南吉文学碑の初めです。この詩は新美先生自らガリ版刷りで作成した一年生第一詩集「雪とひばり」(昭和十四年二月)の「はじめに」にあります。生れたばかりの蝸牛の触角のように自然の事象を敏感に感じるようにと教えていきましょう。五七調九行詩の真中にある「驚かむ」がキーワードです。昭和十七年九月三日の日記にも「でんでん蟲は詩人の心のやうにおどろきやすい。」(全集十二・三八四)とあります。驚くことから詩作は始まりですが、哲学でも同じです。古代ギリシアの哲人プラトンは次のように言っています。「実にその驚異タウマゼイアの情こころこそ知恵を愛し求める者の情なのだからね。つまり、求知(哲学)の始まりはこれよりほかにはないのだ^{注47}。」「風の光」は風のように見えない光のことで、それに「ほめく」は火のように熱くなるという意味です。

生徒詩集に八篇載っている細井美代子(現姓・角岡)さんは次のように回想しています。「思えば詩に始まり、詩に終った四年間だったように思います。あの苦しんだ戦時下に先生の詩によって育かれた私たちは幸せだったと思います^{注48}。」「これについて南吉自身「僕の教育は藝術家的な教育だ。」(昭和十五年一月十五日、全集十二・一五〇)と書いていますが、独創的な作文指導をされました。全六集の生徒詩集をみましても生徒詩二一四篇と南吉詩十篇があります。(全集八・一六〇・一六五頁)。音楽担当の太田あき先生は「生徒たちの人気もの」のなかで次のように語っております。

暇さえあれば、かならず作文を読んでおられました。そしていちいち批評をかれ、その親切さは並大抵ではないと存じます。(略)ながい教師生活に、あの方ほどの逸材はなかつたように思えます^{注49}。

大野秋紅氏の本にはでむし詩碑が建てられるまでの経緯を記した文章が二篇^{注50}あります。それに依りますと昭和二十一年秋の安城高女の同窓会の際に佐治元校長から碑の建設の声がかかり、会場入口に募金箱を置いて寄付を求めました。新美先生が四年間担任をした十九回生は昭和二十二年二月に第二回目の同級会を作法室に遺品・遺影を並



記念碑には、一九回生第一詩集「雪とひばり」冒頭の詩が、書体をまねて刻まれた。

企画展「安城と新美南吉」(安城市歴史博物館、平成17年7月16日発行)より転載

べて「新美先生を偲ぶ会」として行つたのです。佐治先生の発案で始められた建碑の計画は、十九回生が戸田紋平先生のお世話で多量に残されていた「新美原稿用紙」を記念品としていただかれ二十円募金して実現しました。新円切り替えのきびしい時代でしたので、碑文の「はじめに」は書道担当の古寺研珠先生が筆をとられて校内にあつた自然石に彫られたのです。除幕式の日の様子は「学級あさかぜ六号」(昭和二十三年十二月二〇日、安城高校自治会発行)に載つた「新美南吉先生の詩碑完成」の文章に詳しく書かれています。その後半を読んでみます。

講堂の入口の芭蕉の下に木曾川から齎された大きな花崗岩がある。その側面の先生の筆跡を其のまま拡大して此の詩が彫られた。去る十一月二〇日、この碑を完成した記念に先生を偲ぶ集いが催された。深みゆく秋の淡い陽を浴びた講堂には、先生の恩師佐治克己先生、前校長山崎敬夫、平手信之先生始め直接教えを受けた人達が参集され生徒の有志と加えて殆んど一ぱいであつた。追懷談、碑文の解説、絶筆となつた童話、「疣」の朗読、など若くして逝つた作家を偲ぶにふさわしいしめやかな中に嬉しく床しい催しであつた。作法室で遺品と写真が展示され克明に記された日記などに新しい涙を催した。紅葉が夕陽に染まつてカサカサ鳴っているのを見ながら会が果てても一同はいつまでも去り難い思いで座つていた^{注1)}。(点線筆者)

これは「ででむし詩碑」完成当日の雰囲気をよく伝えている貴重な記録です。無署名ですが詩碑建設の推進者戸田紋平先生の手になるものと大野秋紅氏は記しています。

安城公園の「文学の散歩道」に牛の詩碑があります。私は横の道を通るときこの詩碑を見に参ります。「牛」の詩は全十連二十行ありますが、初めの四行が碑文になっています。どの連も「牛は重いものを曳くので」と始まりますのは、牛の単調で忍耐強い歩みを表現していきましょう。歩くが六回ありまして十行目には「静かな瞳で歩く」とあります。歩みを止めるのは終りの三連であり、最後は「休みにはうつとりしてゐる」とあります。牛が労苦の多い働きの後でゆっくりと休んでいるのがよいところです。

牛の詩碑は南吉文学碑の三番目のものです。安城文化協会の二十五周年記念事業として昭和四十七年五月に建てられました。昭和四十六年に泉小学校の先生方が出されました『ででむしの歌・新美南吉と安城^{注52}』という本があります。神谷素光先生の「第二のふるさと・安城」には「文学の散歩道」は初め石川文山・都築弥厚・岡本兵松・山崎延吉・岩槻信治・野口雨情・新美南吉と七基の文学碑を建てる計画であったとあります。

文山(一五八三・一六七二)の「富士山漢詩碑」を見て弥厚(一七六五・一八三三)の句碑「木がらしもまつに移れば松の風」に來ます。そして明治用水を伊与田与八郎と完成させた(明治十三年)岡本兵松(一八二二・一八九七)の句碑「ふりかえり見るや尾花に招かれて」から農業教育を確立させた山崎延吉(一八七三・一九五四)の詞碑「親地而知天恵(地に親しめば天の恵みを知る^{注53})」に移ります。もう南吉と同じ時代の人たちです。稲の品種改良に従事して五十余种を育成した岩槻信治(三三三)(一八八九・一九四七)の歌碑「鳥が歌へば蝶々が踊る」と野口雨情(一八八二・一九四五)の歌碑「日本デンマーク 三河の安城ノ町にやメロンの 花が咲く」を読みますと明るい田園風景が開けてきます。「文学の散歩道」を歩きますと、日本デンマークの安城を築いた人たちと「松林では松蟬が、

ジイジイと鳴いていました」(大全・一八九)の一節が思われます。この前に掲げています新美南吉の有名になった写真で手にしている本は『弥厚翁』であります。大正八年に出版された本ですが、今も歴博の資料室にあります。みなさんに「三人道中」と「六根晴天」の画帖の原寸大コピーを回して見ていただいています。この現物は歴博にあります。平成十六年に南吉関係の資料はすべて安城高校から歴博に寄贈されました。そして十七年七月の企画展「安城と新美南吉」で初めて三つの画帖が展示されたのです。二つの画帖の書き合いをされました一人が貴博のペンネームの鈴木進先生です。鈴木先生はこの桜井支所から二百米ほど南へ行きますと姫小川町のお地藏さんがありますが、その向いの家に住んでおられました。私も小学生のころお見受けしたことがあります。先生は安城高女で地歴・博物・農業を担当しておられました。

「三人道中」と「六根晴天」の作られた学校行事と日時は資料に書いておきましたが、作成された場所が不明でした(全集十二の「解題」五七二頁と五七八頁)。それがようやく画帖の発案者の大村重由先生(公民科・国語・農業の担当、教務主任)の談話^{注54}と解説文^{注55}から分りました。それによりますと「三人道中」は日光の中禅寺湖畔の橋本屋旅館であり、「六根晴天」は富士山の浅間神社近くの湧水の美しい旅館であったことが知られます。

画帖「三人道中^{注56}」は三人の先生方が五葉ずつ受け持って描かれた十五枚の絵と文から成っております。初めの三葉は肖像画で、大村先生が新美先生を、南吉が鈴木先生を、鈴木先生が大村先生をそれぞれ画いています。真中にある「鈴木先生 ひげ剪りのあと」を見ますと南吉の画才はなかなかのものであることが知られます。この画帖では南吉の俳句は「うぐひすの声」一句ですが、修学旅行の俳句にはこれ以外にも十七句あります(全集八・俳句番号206～222)。「山に山椒湖にあいそや中禅寺」「少女の頬にうつる若葉や日光路」などは旅先の地名の入った佳句です。の大村先生の句は「針やいて豆つぶしけり旅の宿」と読みます。鈴木先生の「月清しここ日光の宿に居てすべての



赤鷲(南吉)



夜光虫



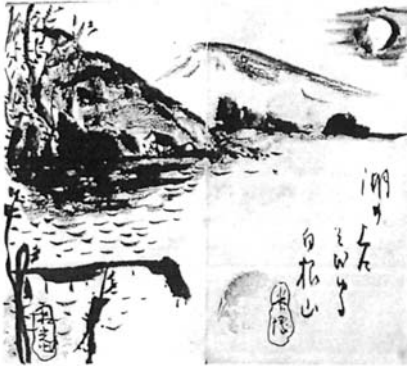
文 - 夜光虫 画 - ペえペえ(南吉)



文 - 赤鷲(南吉) 画 - 貴博

ものを涙ぐみつつ」は画帖中で唯一の短歌であり、先生のお人柄がよく出ていきましょう。

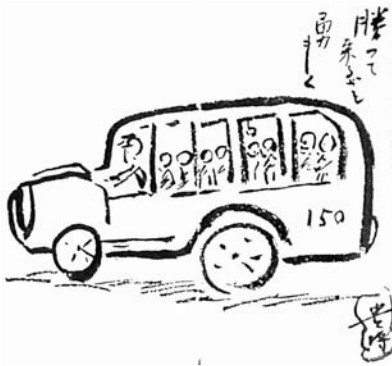
画帖「六根晴天^{注57}」はスタンプ帖十二頁に二十三葉の絵と文が描かれています。南吉のペンネーム耳鳴りについて大村先生は、南吉も「富士山の『砂走り』を降りてきたんだが、それから耳が鳴ると言って『耳鳴』とかくようになった^{注58}」と話されています。また南吉の絵の描き方の特色を大村先生は次のように語られました。「彼の絵の構図は独特ですね。全体をかかない。みんな一部がかくされている。面白いですね。俳句でも、文人画でも、余白というのが重



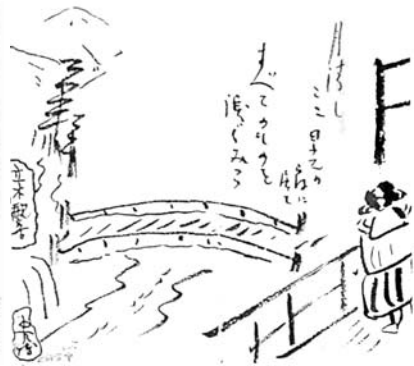
文 - 貴博 画 - 夜光虫



貴博

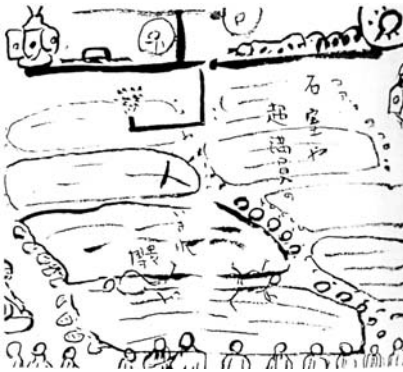


貴博

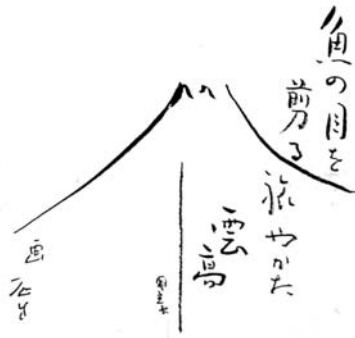


貴博

じられる注⁵⁰。「これは南吉のどの絵についても言えましょう。鈴木先生の「石室や超満員のいきれ」はユーモアのある画文です。鈴木先生の俳句「山酔や一瞬にして砂を噛む」と南吉の絵はこの画帖中の傑作だと思います。同じく鈴木先生の「山百合の今真盛なる瀧の道」の句と南吉の大きな百合の絵は味わい深いものです。「句集ふじ」（全集八・俳句番号287、320）の三十四句の中で南吉が登山の様子を書きとめた二句を引きましよう。「のぼりつめてたゞにうれしさ熱き茶すゝる」「焼原にたゞ夏陽照るたゞ登る」。登山に参加した生徒一人の作文には次



貴博



文 - 夜光虫 画 - 石生(父兄石川亮氏)



文 - 貴博 画 - 正(南吉)



文 - 耳鳴(南吉) 画 - 大村

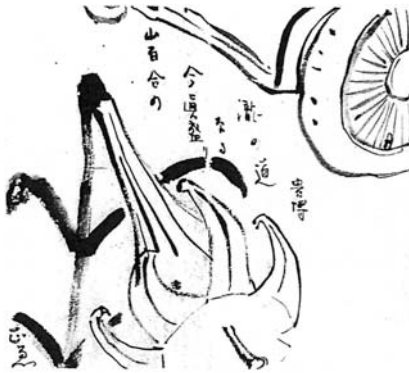
のようにあります。

富士登山の記

七月二十一日〜二十三日

四年 太田 澄

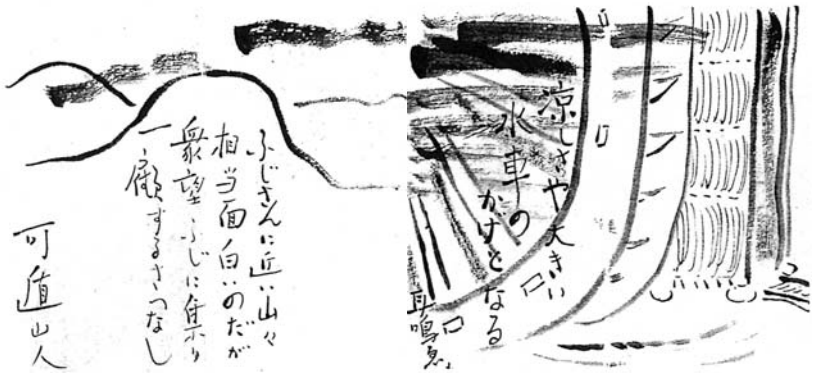
七月二十一日、安城七時二十九分發の列車に乗り込み大宮の宿で眠られぬ一夜を明した。明れば晴天、靈峯富士に向つて第一歩を進めるのである。(中略)二十三日、夜も深い三時といふに宿を出て九合目で御來光、惜しい事に雲が邪魔して充分拝めなかつた。九時頃頂上に達すると、寒風吹荒び身も凍えんばかりであつた。十時にはもう下山にかゝつた。六合目の砂走り、



文 - 貴博 画 - 正 (南吉)



文・画 - 耳鳴 (南吉)



② 文・画 - 可道山人 (南吉)

文・画 - 耳鳴 (南吉)

見渡す限り真黒な砂原に始めて火山の富士らしさを感じた注60。(下略)

この臨場感あふれる文章は富士登山の貴重な記録になっております。申しおくれましたが、昭和十四年度の新美正八先生の担当は英語(一、二、三、四年)と国語(一、二年)、さらに農業(二年)でありました注61。

最後に桜井へ来た南吉について述べておきましょう。「安城高文学報 昭和十三年度第二期」には七月七日の支那事変一周年注62の諸行事がみられます。主なものは全生徒慰問文の作文、記念講演(学校長)、行軍・桜井神社参拝、歌集「いける

しるし」発刊(昭和天皇の御製、御歌と国民の心情を詠じた歌百首を印刷したもので、生徒は修身の本と共に持参して愛読した。)行軍参拝には全生徒二百余名とほぼ全教職員が参加しました(十九回生加藤千津子さん直話)。ですから新美先生は赴任後三カ月の時に初めて旧桜井村へ来たことでしょう。(桜井神社は昭和七年十月十三日に県社に昇格)

年譜の昭和十四年十二月二十四日には次のようにあります。「夕方鈴木進宅へ招待され、三田村俊男と行く。抹茶、すきやき、そば、酒、地豆、みかん、りんごを馳走になる。八時に電車で帰宅。」(全集別巻一)三田村先生は体操の担当でご子息と一緒に南吉は桜井へ向かいました。この日の日記はとても詳しく書かれていますので(全集十二・一二七・一三〇頁)、その主なところを読みますと当時の桜井の様子や鈴木先生のご家庭、南吉の素顔が自ずと浮かんできましよう。

櫻井。岩滑よりもつと邊びだ。學校のやつな感じの役場があつて、その手前に黒い平屋が道に面して立つてゐた。迎へが出てゐるよと鈴木さんがいつた。夕闇の中に、二人の男の子が、つくんと立つてこちらを見てゐたがそれと解つたらしく家の中へ駆けこんだ。村の四辻に立つてゐて、切手や煙草なんか賣つてゐる家といった感じ。せまい庭。犬糞といふ木が一本つくんと立つてゐる。百姓家の隠居所の様なものを茶室にしてある。電氣を隣の部屋から持つて来る。宣子が制服のまゝあらはれ、先生よくいらつしやいましたと手をついて挨拶し、すぐ行つてしまつた。あちらの部屋ではパンケンをする子供達の聲が聞える。

鈴木先生の案内で南吉たちは桜井駅からこの前の道を通つて四つ辻に出ます。すると役場が見えてきて、その向いの鈴木先生の家が描かれています。その観察力と再現する力は驚くべきものです。宣子さんはこの年三月に安城高校を卒業してさらに補習科に学んでいます。四年のとき南吉から英語を習いました。次に茶室で食事をふるまわれた



櫻井村役場

『櫻井村史』より転載

様子と鈴木先生ご夫妻の人柄が詳しく書かれています。

最初に抹茶を一杯づつ、それからすきやき。席があたたまつて来ると気分もくつろいで来た。かうして縁もゆかりもない僕が御馳走になつてゐるのだと思ふと有難かつた。…葱も、かぶも、あとから爐の火でいつてくれた地豆も、みんな家の畑でとれたものだった。鈴木さんはそれが聊か得意に見えた。…奥さんは氣のおけない好い人ではあつたがちよつと調子がひくかつた。飯屋の飯がまついといつたら、私も二十年間病院生活をしましたがといつた。看護婦が産婆をしてゐたのだらう。

(私も鈴木先生の奥さんが戦後も助産婦をしておられたことを覚えて
います。)

御馳走はうまかつた。ことに終り頃、すき焼の中へ蕎麥を入れて喰べるのがよかつた。酒も三人で二本ばかり飲んだ。…鈴木さんは夜子供を寝かせてから奥さんと二人きりでこの茶室に入つて遅く喰べるのがよかつた。酒も三人で二本ばかり飲んだ。…鈴木さんはいふ親切な奥さんだらう。あるだけのものを出したがる奥さん。何とたがる。…八時の電車で歸ることにした。奥さんは地豆を新聞紙に包んでくれた。鈴木さんはミカンを持つてゆきなやといつた。僕はくれるものはみんな貰つた。(笑)だが宣子は貰へないよと心で云ひながら。外はいい月夜だ

写真二点 大見富美子さん蔵



前列左、南吉 右、山崎校長
後列左、佐治前校長 右、鈴木教諭
推定 昭和15年秋



21回生と共に。左端が大見さん
推定 昭和15年夏

「花のき第十六号」(新美南吉に親しむ会編、
平成7年1月15日発行)より転載

つた。懐手した幹雄君を真中にして僕等はすたすと驛の方へ歩いた。喰べたことには満足したが精神的な物足りなさ。鈴木さんが走つて送りに来た。あとから宣子も来た。破れはてた驛の建物の前に、枯れた砂糖きび程の葎が一むら立つてゐた。(点線部筆者)

この年四月から南吉は安城新田の大見坂四郎方に下宿しています。ですから鈴木先生ご夫妻に温かくもてなされた

ことは有難いことでした。日記の初めに「僕を招待したのはすぐ補習科を終へる宣子を買ってほしいからである」とありましたが、宣子さんは後ほど幸田町に嫁がれて牧原姓になっておられます（全集十二・二七〇頁の語注）。この頃の南吉俳句に「妻ほしとおもひてゆきぬ冬の垣」とか「往く人や来る人や衢に妻おもふ」とありますが、偽らぬ気持ちであったでしょう。

先ほど読んでいただきました新田小学校の詩碑「百姓家」と「梨」が南吉詩の最後のものです。「百姓家」には「明るい幸福」があり、「梨」には明治用水川上の今村の地名がみえます。「螟虫駆除につかれて」とありますが、大見富美子先生ご所蔵の写真には農作業をした南吉の珍しい顔が写っています。「安城の新美南吉」(四三頁)には「螟虫駆除作業の後で、生徒が持っているのは螟虫駆除用の鎌」とありますが、生徒たちと先生方の表情はなんと明るいことでしょう。「梨」の詩の後半は月夜になって「どこかの村には／祭も近くて笛太鼓が／鳴っているだらう」とありますから、桜井神社の祭礼が思われます。「百姓家」と「梨」の詩は安城賛歌ですが、南吉の安城への別れの歌にもなりました。

資料 1に書き出しておきましたように、ここの桜井公民館図書室には「新美南吉の作品と参考文献」が四十冊以上もあります。私は毎日これらの本を読むことを楽しみにしております。私のつたない話が新美南吉先生の童話作家・詩人・教師としての一面でもお伝えできましたでしょうか。本日はご静聴まことにありがとございました。

(本稿は講演用原稿を省略・訂正し、また加筆して成ったものである。平成二十四年十二月十三日)

〔注 解〕

- 1 第二十六回IBBYニューデリー大会(一九九八年)基調講演「子供の本を通しての平和・子供時代の読書の思い出」(定本美智子『橋をかける』(すえもりブックス発行、一九九八年)(講演はビデオで放映された。)
- 2 「貝がら第一号」(昭和四十二年十二月一日発行)の「編集後記」に「この感想文集を、新美南吉詩集『墓碑銘』の一篇から選んで「貝がら」と名付けたのは、安城の子どもみんなに南吉童話を読んでもらいたいとのささやかな願いからである」と(M・K)(「故神谷素光氏」は記している。)
- 3 「貝がら第二号」では小学生五名、中学生二名が授賞した。(『花のき村と盗人たち』小学生三名、『おじいさんのランプ』小学生二名、中学生二名は『堀』などの小説。)(この号の応募者数は小学校の部三三点、中学校の部十二点の四五点である。前掲書、二六頁。)
- 4 題名の「ひいらぎの木の下で」は、本文中に「ひいらぎの木の下や(中略)目がしらが熱くなってくるのであった。」と引用されていることから、『校定新美南吉全集・第七巻』(三四五・四六頁)の無題『常夜燈の下で』であることが知られる。初めに「私がこの本を読もうと思った動機」とあるが、『校定全集・別巻』の『新美南吉著作目録』にはこの題名の本(昭和四五年まで)は見当らない。
- 5 岩波文庫『日本児童文学名作集(下)』(桑原三郎・千葉俊二編、一九九四年三月一六日第一刷発行)には南吉童話の代表作として『牛をつないだ樁の木』が収録されている。千葉俊二の「解説」には次のようにある。『牛をつないだ樁の木』『花のき村と盗人たち』『和太郎さんと牛』など多くの遺稿が、没後に友人たちの手によって発表され、その存在を知られるようになったが、死を覚悟して病床で書き綴ったそれらの民話的メルヘンはある意味で南吉の遺書である。『牛をつないだ樁の木』の海蔵さんが人のためになることを願って残した仕事、つまり道を行く皆のために掘った井戸が、いつまでも人々の喉をうるおすように、南吉の残した童話も、人のために生きることの尊さを伝えて、いつまでも人々の心をつるおしつづけるだろう。それは南吉の、次の世代の子どもたちへ託したメッセージである……(三〇二・三頁)。

- 7 岩波文庫『新美南吉童話集』所収「童話における物語性の喪失」(千葉俊二編二〇一一年第一六刷発行、三二五頁)。
 8 新美南吉記念館編・発行の『新美南吉』(平成十二年五四・五頁)の「新美南吉年譜」による。
 9 岩波文庫『日本童謡集』(与田準一編一九五七年二月二〇日第一刷発行、二〇〇五年九月二五日第六二刷発行、二二九頁)。
 10 前掲書『新美南吉』四二・三頁。
 11 鈴木三重吉と北原白秋の訣別のあと南吉は「赤い鳥」への投稿を控えた。その原因について「赤い鳥」の「張紅倫」で三枚、『こん狐』で四枚の挿し絵を描いた深澤省三は「鈴木三重吉 赤い鳥時代のこと」の中で次のように証言している。「酒が入らない時でも二人は常に同時に王様であった。或る夜、二人の王は、激論の末、三重吉の投げた盃が、白秋の眼鏡を割つた。この夜から、二人は絶交した。」(日本現代文学全集、講談社版41「鈴木三重吉、森田草平、内田百閒、中助勸集」月報87、一九六七年)。
 12 前掲書『新美南吉』五二・三頁。
 13 『南吉のふるさと』(昭和六十年七月十日、発行者半田市博物館、編大石源三)八頁と二十一頁。
 14 大石源三著『新美南吉の生涯』(改訂版)(エフエー出版・一九九三年・一七〇頁)に「昭和十八年三月二十二日、午前八時十五分、南吉は(略)岩滑の中郷八一番地の離れの一室で二十九歳七カ月の短い生涯を閉じました」とある。他方『南吉おぼえ書』の「新美満寿意さんとの話」(丹羽医院の看護婦)は神谷幸之氏に次のように答えている。往診に丹羽先生と行かれた家は「私たちの往診に行つた家は、常夜燈のあるところの家で、(略)お寺の近くの『はなれ』なんつてこへは、亡くなるまで、一度も往診してないの。」(八五頁)南吉の寝ていた部屋は「そのタタミの仕事場を、障子で隔てた奥の六帖の部屋です。」その部屋の真中に薄い枕で、頭を西に向けておりましたネ。(八六頁)死んだ日に、丹羽先生と往診に行つたの「死んだ日の前の夜、十時頃に往診に行つて、翌朝に死んだという報せを受けました。」(八九頁)。
 15 福岡猛志著『知多の歴史』(シリーズ愛知2、松籟社、一九九一年三月十五月初版発行、一三六・三七頁)。
 16 小栗大造著『歌綴・南吉と岩滑』(一九九三年八月一日発行、一粒社、二四二・四三頁)。同じ著者による『南吉のやなべ』^外

- (一粒社、二〇〇八年)の「お寄りさん」(四一・二頁)には次のようにある。『お寄りさん』というのは、『お寄り講』のことで、この地方で『お念仏』と呼んでいました。亡くなった人の家で四十九日まで毎週、同行ドウギョウといって同じ宗派の人達や、その近所の人々が『お念仏』に集まることです。『なお知多と岩滑(光蓮寺と常福院など)の仏教史』については、斎藤寿始子の「ふるさとのこころ・新美南吉と宗教性」が詳しいが、その中には次のようにある。「南吉の周辺にある念仏の諸層は、(略)より土俗的な念仏信仰の存在を認めないわけにはいかない。(略)庶民の間には土俗の念仏信仰が失われることなく、脈々と受けつがれているのである。(略)『こん狐』の吉兵衛の家で行われたお念仏には、民間の同行衆による念仏講の色彩がみとめられる。」(校定全集第一巻月報・一九八〇年八月、大日本図書)小栗さんの歌に「ぼくぼくと木魚は浄土のおよりさん」とあるから、「吉兵衛(略)の家までくると(略)木魚の音がしています。」(大全・一一六)は浄土宗の(常福院の)門徒である。
- 17 中山文夫「私の『こんぎつね』」(新美南吉研究 アリス館新美南吉全集、童話集)付録、一九七五年三月二〇日)
- 18 「南吉研究第31号」《特集》「私の南吉覚え書」その一、その二、その三、中山文夫著、新美南吉研究会、平成六年六月三十日。
- 19 遠山光嗣「『こんぎつね』の殿様中山家と新美南吉・平成十八年度特別展より」は中山家の歴史と、南吉と深い関わりをもった中山家の人たちについて詳しく記述している。(新美南吉記念館「研究紀要」第13号、平成十九年三月)
- 20 武豊の稲荷さん、旭村、彦州の森の狐、六貴山の狸の話など。岩滑では今でも「恩を返した六蔵狐」の昔話が語り伝えられている。(『統知多のむかし話』河和中学校編、昭和55年6月2日、愛知県郷土資料刊行会発行)
- 21 「私の南吉覚え書その三」には「母の童話」として「屁こき平七」「六貴山の狐」など四編の民話が収められている。「葛の葉」…京の学者が遠国に流されて傷ついた狐を助けた。流人は美しい女人と結ばれて男の子を得た。女人は夫に尽くし、二人には楽しい日々が流れた。「夫は前々から、妻が食べるものも食べずに機を織るのが不思議でならなかった。或る日、そとと仕事場を覗いて見ると、妻がカワズやドジョウを食べていた。夫が驚いて思わず声を上げると、その拍子に妻は狐の尾を出してしまい、恋しくは、尋ねて来て見よ、東なる、信太の森の、うらみ葛の葉」という歌を残して姿を消した。」(三七頁)

なお『西三河の昔話』（山本節・永田典子・山田八千代編著、一九八一年）にも、「99 鶴女房」（西尾市）、「100 狐女房」（吉良町）などの類話が採集されている。

22 「大福寺の狐」… 足利時代創建の大興寺より古い大福寺が村東の山裾にあった。「ある年突然山崩れが起きて池が出来、寺は一瞬で水底に沈んだ。（略）今でも夕暮れ周囲の松林に風が吹くころ、決まって池底から、鐘の音がゴーンゴーンと聞こえてくる。寺に住みついた狐が鳴らすのだという。」（私の南吉覚え書、その二）（三三頁）村の人々はこの「鐘つき池」の狐を「こんぎつね」と呼んでいた。（私の「こんぎつね」）

23 大石源三著・前掲書二〇四頁、都築栄男氏直話。「わしは、正八君から、はりきりについて教えてくれといわれたので、江端兵重さのはりきり綱の張り方や場所、うなぎのとり方などを話してやったことを覚えていいる。今考えてみると、正八君は『こん狐』の中にはりきりを書こうとして、わしに聞いたのだらう。」

24 原名『子供と家庭の童話集』は民族童話の最初の収集として世界中に親しまれている。（初版第一巻一八二二年八六話、第二巻一八一五年一五六話、一八五七年第七版二〇〇話が現在ひろく世界で翻訳されている。）それだけでなく民話収集の模範とされて、民話の学問的研究の基礎となっている。新しい研究によって伝承民話の最初の話し手は上流家庭の姉妹であることが明らかにされた（ハインツ・レレケ教授）。それは南吉が西洋文学や医学も学んでいた教養豊かな中山しゑ夫人から昔話を聞いたことに似ている。

25 小栗大造・前掲書四一頁。

26 この『グリム童話集』の奥付頁の前頁に南吉は、「一九三一、四、六同盟書林で買った。多分これが自分でもつけた金で買った最初の本になるであらう。」と書いている。この童話集は『世界童話大系14・グリム童話集上』（誠文堂一九三〇年七三四頁）である。書きこみのある目次の中に、「五 狼と七匹の仔山羊」、「三〇 プレーメンのお抱へ楽隊」など五篇の動物童話のあることが注目される。（全集別巻二、四三九）。なお、この本の訳者は、岩波文庫の『完訳・グリム童話集』の『グリム童話集』序に「本書はかつて『世界童話大系』の中に収められたものの改訂版である」（昭和十三年三月）とあるから、金田鬼

- 一である。原文に忠実な翻訳と言われる。
- 27 『巨男の話』は、昭和四(一九二九)年六月六日に脱稿されて、その日のうちに弟に読み聞かせると涙を流した。六月八日、学校の教室での第二回朗読会で読まれた。さらに八月一九日の同窓会で『巨男の話』を口演している。(点線筆者)(全集二・四二五「解題」による。)従って代用教員として子供に口演したのは四回目であるから、南吉のこの作品に対する愛着と自信のほどが知られる。
- 28 新資料紹介「その日その日」 遠山光嗣、新美南吉記念館「研究紀要第八号」二〇〇一年(創作)『都築先生』六一頁。
- 29 原典『子供と家庭のメールヒエン集』(レクラム文庫、一九八〇年、一六一・六四頁)邦訳・金田鬼一訳『完訳グリム童話集』(岩波文庫一九九七年第三六刷二七五・八二頁)。
- 30 「知多つ子」《特集》新美南吉、発行人新美美付子、編集藤井友樹、発行所創夢社(昭和五五年五月発行、二七頁)
- 31 「新美南吉童話全集第三巻付録 3」(大日本図書、昭和四八年九月三〇日二刷発行、四頁)
- 32 北吉郎著『新美南吉「こん狐」研究』(一九九一年五月一五月初版発行、教育出版センター、一六・七頁)の第一部の、「こん狐」の成立時期の検討」には次のようである。
- 「榊原氏の証言は南吉の話しぶりの印象を中心に書いている。(略)証言者が一人であり、しかも受け持ちのクラスとは異なる児童による三十年前の記憶であるところから、この児童の証言は貴重であるが今一つ説得力に欠けている。(略)「こん狐」の成立時期は着想・構想化を含めて代用教員をやめた九月以降ではなかったか、と考えられる。」
- 33 河合弘「新美南吉との別離」(『新美南吉研究』「アリス館版新美南吉全集小説集付録 四頁」)
- 34 新美南吉記念館「研究紀要第一号」(一九九四年)の終りにある初代館長片山秀雄氏の「ささやかな一歩」には次のようである。「平成六年の六月五日に、童話の森と新美南吉記念館がオープンしてから、九か月の月日が流れました。平成七年三月五日現在で、この館を訪れた人々の数は九五、一八四人。北は北海道から南は沖縄まで、幼・小・中・高校生はもちろん、大学生から熟年者まで、さまざまな年齢の人々が、南吉文学に親しみながら、四季折々の自然につつまれて、南吉文学の舞台

に想いを寄せてきました。(下略)「

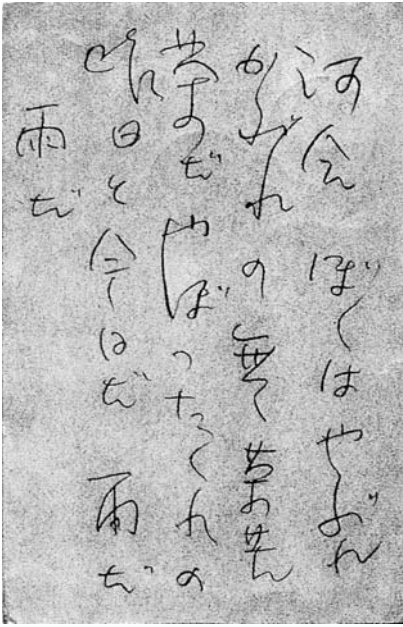
35 この特別展より前に次の文献が出ています。新美南吉記念館「研究紀要第十号」(平成十六年三月)、「新美南吉と木本威子・初恋の女性とその周辺」遠山光嗣

実弟「木本崇さんの話」より

「威子さんの結婚が決まった頃のことを何か覚えてらっしゃいますか。」の問いに次のように答えておられる。

「威子は母に南吉と結婚したいと打ち明けて頼んでいたようです。母と泣きながら喋っていたのを子どもながら覚えていてます。やはり南吉の方に深く愛情を感じていたんじゃないでしょうか。」(八一頁)

36 新美南吉記念館「研究紀要第十四号」(平成二十年三月)、「河合弘に宛てた二十七通の手紙」『校定新美南吉全集』未収録書簡・「遠山光嗣。」



新美南吉が河合弘に宛てた葉書
(1935年8月15日消印)
書簡番号5(72頁)

37 ここには「例の僕の心の複雑だといふこと」が二回記されている。前掲の『新資料紹介「その日その日」』には『初恋の女性』に死てた(略)書簡の下書きなのか、それとも日記として書かれたのか判別できない(五一頁)十通の書簡文がある。その六番目には次のようにある。

「(前略) Mさん、今、僕は告白する。(中略)僕は、小さい時に、母親を失くした。僕は小さい時から、愛のめぐみをうばはれて了つた。僕を愛してくれる者は、誰もなかつた。僕自身以外には、小さい時から、そんなだつた僕には、すべての人が僕の敵だつた。ある人々は僕の味方になつてくれた。けれど、その人たちも、おしまひには、白い目で、僕をはねのけてくれた。それは、私の頭の中で一つの概念みたいなものを建築させてしまつた。その概念があなたに対しても心から信じてもいい筈のあなたに対してもすつかり消えて行つてくれなかつた。(下略)

一九三二・七・二三夜 正八拜

僕の恋人Mさまに、(六〇頁)

これは卒直に告白された南吉文学の原体験である。

38 久米常民(一九二三・七七)大正二年五月五日、知多郡東浦町藤江に生まれる。八高を経て、昭和十二年東大文学部国文科卒業(同郷の久松潜一博士に師事)。旧制中等学校教諭、旧制陸軍予科士官学校国文科教諭、県立高校教諭を経て、愛知県立女子短期大学、愛知県立大学教諭。著書『万葉集の誦詠歌』(塙書房、昭和三十六年七月)、『国語教育の方法と実践的理論』(右文書院、昭和四十一年九月)、『万葉集の文学論的研究』(桜楓社、昭和四十五年三月)、『随想・書き、書く、書け』(桜楓社、昭和四十六年十月)、同書中に「新美南吉の手紙・南吉との交友の思い出」がある。(以上の四書は愛知県立図書館蔵)久米の童話『沙漠に住む人々』は一九三二(昭和六)年七月号の「緑草」に掲載された。(全集二・四二四)

39 「新美南吉研究」(アリス館、新美南吉全集物語集付録、一九七五年三月二〇日、八頁)

40 巽聖歌著『新美南吉の手紙とその生涯』(英宝社、昭和三十七年七月十日増刷、四八・九頁)

41 『新美南吉詩集 花をうかべて』美しい日本の詩歌(責任編集・北川幸比古、一九九五年五月三十一日初版、一九九七年

- 十月十五日第五刷発行、岩崎書店）より転載。
- 42 芭蕉『おくのほそ道』（萩原恭男校注、岩波文庫、四五・六頁）
- 43 教え子の磯貝ちづ子さんは次のように語っている。（放課後）「新美先生と山田先生が、本当に仲良く梅の木の木の下でね。朗らかな顔をして。恋人という風でなしに。坐っていたこと。私は覚えているの。」（『南吉おぼえ書』一二五頁）
- 44 異聖歌前掲書、六八頁。
- 45 『南吉おぼえ書』の「遠藤慎一さんとの話」（五一・六頁）
- 46 『南吉画帖』（「三人道中」、「六根晴天」、「筆勢非凡」の原寸大の複製、限定八〇部内第四番、発行財団法人かみや美術館、平成元年三月、安城市中央図書館蔵）
- 47 プラトン、田中美知太郎訳『テアイテトス』（プラトン全集2、岩波書店、一九八〇年五月九日第二刷発行、二二〇頁）
- 48 大野秋紅著『新美南吉ノート』所収の「安城高女」生徒詩」と南吉の詩」より転載（図書館だより、発行昭和五四年一月一日、編集、安城市立図書館、新美南吉に親しむ会、三一頁）
- 49 「新美南吉研究（アリス館版、新美南吉全集日記（2）付録、一九七五年三月二〇日、三頁）
- 50 大野秋紅前掲書所収の『蝸牛詩碑考』と『蝸牛詩碑考』補遺・発見された記録・」
- 51 大野秋紅前掲書、六三頁。
- 52 『ででむしの歌・新美南吉と安城』（昭和四十六年、狐牛会編集）所収の神谷素光「第二のふるさと・安城」（十三・三八頁）
- 53 山崎延吉の筆蹟（『我農生三十年 興村行脚』山崎延吉先生還暦祝賀刊行會、編輯兼發行者吉地昌一、昭和七年）より転載。

巖波文庫
新美南吉全集

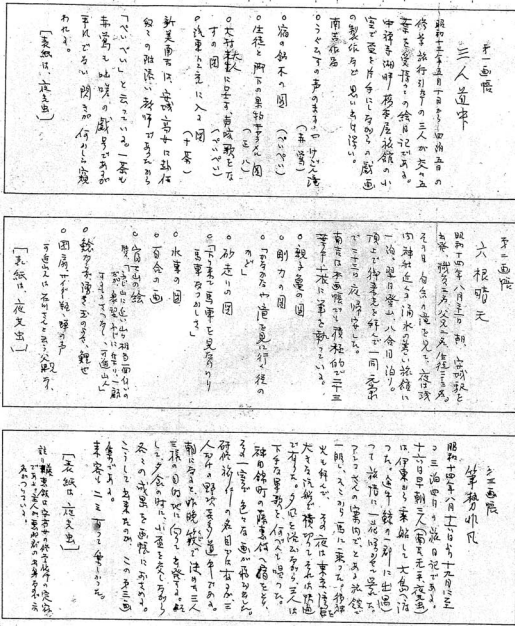
巖波文庫
新美南吉全集

巖波文庫
新美南吉全集

54 『南吉おぼえ書』の「大村重由さんとの話」(六〇三・三八頁)のうち「南吉と三冊の画帖」には「筆勢非凡」「六根晴天」

「三人道中」の順で画帖の成立事情と内容が詳しく語られている。

55 前掲の『南吉画帖』の付録である神谷幸之氏の「南吉画帖について」の終りに、大村重由先生が寄せられた画帖三冊についての貴重な解説が付せられているので転載しておく。



56 『安城の新美南吉』の画帖「三人道中」より転載。

57 前掲書の画帖「六根晴天」より転載。

58 『南吉おぼえ書』 六二七頁。

59 前掲書、六三五、三六頁。

60 「安城高女學報 昭和十四年度第二學期」に掲載。

61 「安城高女學報 昭和十四年度第一學期」による。

62 昭和十二（一九三七）年七月七日盧溝橋で日中軍衝突（日中戦争はじまる）。七月十一日現地停戦協定成立。政府華北派兵を声明。「北支事変」と命名（九月二日「支那事変」と命名）。八月十三日上海で日中両軍交戦開始。八月十五日政府、中華民国政府断膺懲を声明、全面戦争に突入。（『日本史年表増補版』（歴史学研究会編、岩波書店、一九九七年五月七日第七版発行、二八八頁）

63 『櫻井村史』（昭和十八年二月十一日発行、編輯兼發行者李原利一、發行所、櫻井村役場（愛知縣碧海郡櫻井村大字小川字的場一〇一・二）この桜井村役場は昭和二十年一月十三日の三河地震で倒壊した。この「役場」が全集十二、二七〇頁の語注には「現・安城市桜井町西町の安城市役所桜井支所にあつた」とあるのは事実と異なる誤りである。

〔作品の引用と略記〕

「梨」の詩の引用は巽聖歌編『新美南吉詩集 墓碑銘』（英宝社、昭和五〇年七月一〇日）に依つたために、『校定新美南吉全集第八巻』（大日本図書、一九八一年一月三日）との間に本文の異同が生じている。他の詩の引用は、『校定新美南吉全集第八巻』と谷悦子編『新美南吉詩集』（角川春樹事務所、二〇〇六年一月一八日）に依り、頁数は省略した。散文の引用は大日本図書版の『校定新美南吉全集全十二巻』からは「全集」と略記して巻数と頁数を示す。鳥越信編『新美南吉童話大全』（講談社、二〇〇五年三月）からの引用は「大全」と略記して頁数を記した。

〔付録〕

一、第9回桜井高齢者教室

「新美南吉に親しむ」資料 石川勝治

導入・幼年童話「でんでんむしのかなしみ」と皇后美智子様の基調講演

1 桜井公民館図書室の南吉作品と参考文献

2 新美南吉年譜

3 新美南吉文学散歩(半田市)

4 安城新美南吉を歩く

5 新美南吉文学散歩と文学碑

参考「童謡、詩、短歌、俳句」

6 学校行事点描 画帖「三人道中」「六根晴天」

7 安城時代の新美南吉略年譜と写真二葉

8 安城の子どもの読書感想文「貝がら」第四十号目次

二、平成十九年度 桜井高齢者教室の記念文集「寿」から

受講者の感想文より

東町 山本登代子

桜井高齢者教室に参加させていただき大変勉強になりました。
新美南吉に親しむ、石川先生の講義でんごんごんのかたしめ
か心に残り又画帳三人道中は楽しく拝見いたしました。
恩師のなつかしいお顔が走馬燈の如く巡り来たかたしめ青春の
一頁がよみがえり感動致しました。あのエピソードに彼岸花
が咲く頃久しぶりにごんごんつねの里へゆくりと尋ねたいと思
いました。

毎年講義の先生との出会いで新しい私を未知の世界へ誘って下さ
いましてありがとうございます。

私は才九回目に「新美南吉に親しむ」を愛読し、桜井に南吉が大変縁が
深いこと、又石川勝治先生の「桜井」が方だということ、又私と孫が南吉の読
者感想文コンクールで二度も受賞した事を先生からお聞きして大分うれ
しさを覚えました。その後は、私も若く頃は小説を読むのが大好きで夜明け迄
夢の中で読んでいたのを思い出しました。暫く若く頃は願った心で致しました。
宛先は、本を読むとすぐ眼が疲れて本も余り読まなくなりました。

東町親友会

稲垣 七子

南吉第二のふるさと

加藤 弘巳

童話 作家南吉は知多で生れ、三浦オカウ己なまゝ二十九才まで、
 学校の生先ししていた五年間は、生涯で経済的にも安定し心身と
 も最も充実した五年間に、代表作家たぐきん書れ、安城は
 第二のふるさとと呼ばれています。でも母な人と結婚できず
 残念でした。石川先生のお話を聞ながら、私くしも南吉の
 生家養家、又矢勝川に赤く咲いた彼岸花見、長い手を
 歩きました。

南吉も子供頃、矢勝川で走り廻って遊ぶんだ華と思ます。
 皆根も一度歩きに行ってくがさへ、素暗です。

高齢者教室には毎回どんな話をかここかできるか、楽しみに参加致しました。
 「子どもに期待するもの」「絵から心を読む」「新美南吉に親しむ」など大変
 興味をもって受講できました。

桜第一和祥会 羽根 佳代

高齢者教室に三年連続に参加

出来ました事に感謝致します。

適度の運動(カローリング)は楽しかうたと無理の無散歩

新美南吉の伝説が安城・梅井に因する事を痛感しました

西町梅西会 犬塚峯雄

桜井高齢者教室に参加して

オ一和祥会 吉村紀美子

毎回二時間の枠の中で諸先生が熱く語って下さり多くの知識を得る事が出来とても満足しております。

絵の診断では性格をひきたり当て大変驚きました

「新美南吉を親しむでは南吉の作品が多く取りあげられる
昨今安城高校の先生として活躍され梅井にも訪れたとのこととて
も身近な人として誇りに思いました。今後も折りに触れ頂いた資料
を無駄にせず学んでいきたいと思ひます。

新美南吉にフいても多くの作品に触れたいなりました。
ためになるお話しを多数聞かせて戴き、これからは健康で
楽しく日々をおくりたいと思っております。

有難うござります。

城向 向と会

新美 伸子

高齢者教室

榊原 美子

縁あって六月の講義を受けた。機会と頂戴。お話しは。
いろいろの方舟から見て興味ある内容の研修であると思っております。
私が楽しんでみていたのは「舞」の「食生活」と「南吉の親」の
時間でした。地域と言う土地敘師の私と持ちながら童話の世界に
生きる人物桜井駿用と歩む水たの話をここで見る物面白い
ことなど作品のほかに隠れているではないかと思ひ、今一度読んでみる様
話をした。まわりの年齢にそろそろこの土地の事を探りたいと思う。

五月に始まつて最後迄参加させて頂きました。
私はお才になりました。これ迄に三回役がさました。
そのたびにいつも色んな事に体験が出来ました
又、石川先生の話をき、良い勉強になり
有難う後座居ました。

同法会

犬塚あきる

皆様には感謝いたします。心この講義をニッソツ書の
せていただきありがとうございます。高齢者の運動不足にカローリングは男性
女性を問わずおもしろく出るところがよいです。又、米山
先生のぬぎく拝見絵を見て人の心を詠み取るお話は印象に
残りました。又、最後の石川先生の歴更に残るお話の内
身近にこの梅井におられた方が居られ事はまったく知りま
せんでした。もう一度お話を聞いて見たいです。 袖谷文男

十九年度の高齢者教室を受講しく 城向上会 山本義昭
高齢者教室は「高齢者としての社会生活の適応性を養い、楽しく生きること
を学ぶ」とを目的として開催されました。

十九年度の受講者は一〇九名、準備した席はいつも満席となり、毎回椅子を
追加するほどの盛会でした。これは、計画された内容がくらしの法律の話
から楽しい食生活の話や新美南吉の境涯の話等々、多様な講義内容が
私達高齢者のニーズに合っていたからだと思います。なかでも私は「中高年
を取りまく暮らしの法律Q&A」で相続や遺言についての話は身近な法律
として大変勉強になりました。

来年度も、また楽しい高齢者教室となりますよう願っています。

高齢者教室に参加して

三浦部会 岩瀬 収 夫

身近なくらしの法律や医学、繪の見方、楽しい食生活など、どの話
も今迄、気の付かなかったことが、勇々く大妻参考になった。

文学は苦手で少いむづかしかったが、新美南吉の教育に対する心がまえや、
昭和の始め頃の、安城や桜井の様子が見えるような氣もして、興味と覚えました。
各講師さんの話の方も上手で、毎回を楽しく聞かせて戴きました。
大妻良かったと思います。

平成19年度 高齢者教室実施結果

5月31日(木)	「開講式」 くらしの法律 矢田良一先生	102人	○ 回数 10回 ○ 受講者数 109人 (男64・女45) ○ 出席率 85.6% ○ 皆出席者数 39人
6月7日(木)	子どもたちに期待するもの 山本光子先生	93	
6月28日(木)	花栽培とやすらぎ 石川政子先生	94	
7月19日(木)	わざ技拝見 - 絵から心を読む - 米山郁夫先生	98	
9月6日(木)	ツボと気血 足達義則先生	95	
9月20日(木)	軽スポーツ - カロリング - 伊藤通義先生	79	
10月11日(木)	楽しい食生活 中村とめ子先生	91	
10月25日(木)	そなえあれば安心 - 我家の防災 - 安城市防災室	95	
11月8日(木)	新美南吉に親しむ 石川勝治先生	98	
11月21日(水)	校外研修 - 摩訶耶寺・気賀関所 - 事務局	88	

桜井高齢者教室運営委員

役職名	氏名
委員長	加藤正明
副委員長	山本義昭
会計	岡田耕司
書記	長谷部宗平
監事	平岩勝
〃	岩瀬牧夫

注)「楽しい食生活」を話された中村とめ子氏は、安城高女における新美南吉の教え子である(21回生)。『安城の新美南吉』の「作文帳」には、中村氏の作文と新美南吉の批評の言葉が載せてある(14 - 15頁)。

三、新美南吉文学散歩と文学碑

○ 南吉生家
半田から河和へ 平成二十四年三月二十一日(筆者撮影)



「生い立ちの地」碑



「冬ばれや」句碑

○ 岩滑小学校

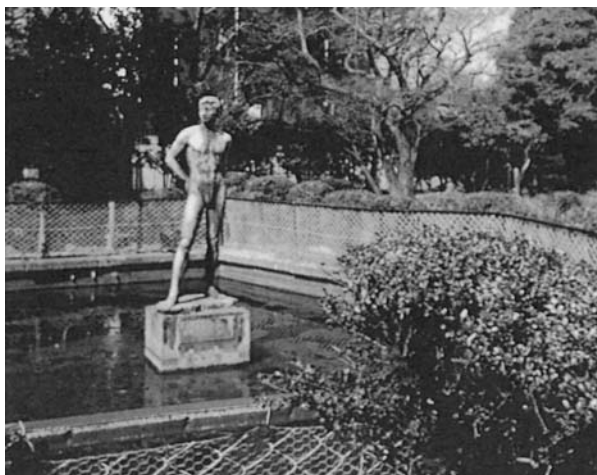


「権狐」文学碑



「落葉」詩碑

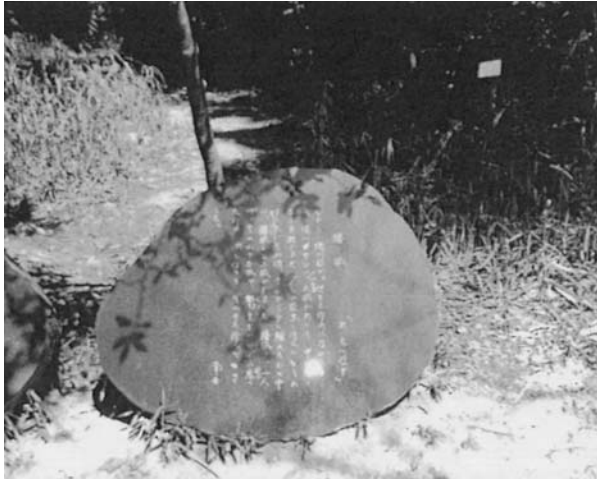
○
半田
高校



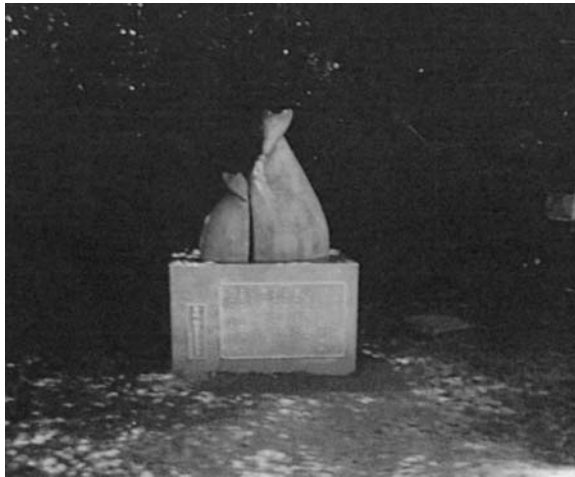
日記碑前の若人像



半田中学三年の日記碑



「權狐」草稿碑



狐親子像「手袋を買ひに」



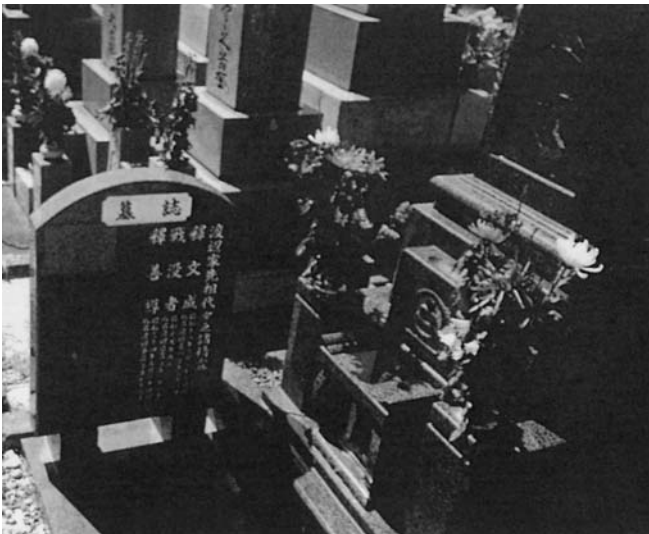
「デンデンムシノカナシミ」記念碑



昭和三十五年十二月建立



○ 半田市柁町・北谷墓地



渡辺家の墓と墓誌

○ 美浜町河和



観光センター前「少女細く」句碑



河和の海



河和小学校「石何年」句碑



安城高校「ででむし」詩碑



安城公園「牛」詩碑

安城市 平成二十四年三月二十五日（筆者撮影）



新田小学校「百姓家」詩碑



新田町の大見家の下宿を訪ねた筆者(平成十八年夏)

大見さんは南吉が赴任したとき三年生でしたから、この明るい詩は着任して間もない頃のものかと思われます。白いエプロンを広げて太陽の光を受けている少女から安城時代の少女像が始まりましよう。十八回生の佐藤久代(旧姓・竹本)さんは次のように語っています。「英語の時間に時々自作の詩などを黒板に書いて教えてくださいました。」(六七頁)同じく十八回生の山口芳枝(旧姓・和田)さんも話しています。「ネムの花の咲く頃、野外活動で詩心を教えていただきました。」(同)ネムの木は写真にあります校庭の池の東端にあります、「南吉先生もしょっちゅうここへ来てみえました^{注3)}。」私たちも今から南吉の詩心を学ぶことになりました。二十回生(昭和十四年四月入学)の岡田工三子(旧姓・和田)さんの回想になりますと様子が少し違ってきます。

二年生の秋でした。英語の授業中、ふつと職員室に帰ってしまった。私は再開を願いに参りました。暫くして先生は少し緊張した面持ちで教室に來られ、黒板に「青い青い月夜だ いとどの虫は土蔵のかげで細い糸ひいた」と書かれ、再開されました。その時の印象は今も鮮明に残っています。(七〇頁)

みことな短詩を覚えてくださいました。新美先生はどうして授業を中断されたのかと生徒たちも緊張していただしよう。教室に來られて黙って「青い青い月夜だ」と板書されたのですから、私たちも鮮明な印象を受けます。角岡美代子(旧姓・細井)さんも先生が板書された詩「雲」を筆写されたノートを今も大切にしておられるそうです。その前半は次のようにあります。「行く雲はノ愁ひの如くノその一つノたもちてあれよ。ノ月夜にはノ青くなげけよ。」(全集八・一三七)この詩が書かれたのは、「一年詩集の序」の次の日(昭和一四・二・二)ですが、角岡さんはその当時を「自由詩の勉強から叙情詩に入るとき、こんな詩はどつか、といって板書された。」(同)と回想されています。叙情詩の作り方を実作によって教えたのですが、そこには南吉詩の核心が表わられています。

昭和十六年二月に学芸会のための戯曲『ランプの夜』が書かれました。劇の初めて停電になりました、姉妹の交わ

す台詞は次のようにあります。

妹 あら、何かあそこに光ってるわ青白く。 姉 どこ？ 妹 ほら、窓まどの向こう。姉 沼ぬまよあれは。月の光を
反射はんていしてるのよ。いいな。すつてき。詩ができそつ。 妹 ちえつ。文学少女はこれだからいやだ。姉さん、お父
さんのランプをつけましょう。(大全・三六六)

このようにユーモアのある会話の中で詩の作り方をさりげなく語らせています。そして昭和十七年五月に書かれた
『花のき村と盗人たち』の初めに散文詩のような描写があります。花のき村に五人の盗人たちがやってきた季節は、
それは、若竹わかたけが、あちこちの空に、かぼそく、ういういしい緑の芽をのばしている初夏のひるで、松林では松蟬まつせみ
が、ジイジイ鳴いていました。盗人たちは北から川にそつてやってきました。花のき村の人口のあたりは、すかん
ぼやうまこやしの生えた緑の野原で、子どもや牛が遊んでおりました。(大全・一八九)

このように村の平和な風景が讃えられています。この作品が書かれてから一月ほど後の日記(七月三日)には次の
ようにあります。

果して平和が常態なのか。戦ひが常態であつて、平和は戦ひと戦ひとのすきま、つまり變態にほかならぬもので
はあるまいか。戦ひが常態であるならば文學をすることも學問をすることも(實學以外は)何と無意味なことであ
らうか。(全集十二・三八二)

これが南吉が生きていた時代の現実でありました。(前年の十二月八日に日本は米英と開戦)それを見すえて無力
とは知りながらも、文學の営みを続けていたことを忘れてはならないでしょう。それでは初めに俳句をお一人で二句
ずつお読みください。後で簡単なコメントをします。

南吉詩歌にみる安城の四季

資料一 南吉俳句の四季

南吉俳句より

(春)

春風やしやつくりをして半田まで
春風やまだ角の出ぬ仔牛達
何やらむ人戀しくて春の雲
行き行けど穂麥ばかりぞ五月旅
少女この頬にうつる若葉や日光路
梶子や少女の脛の細きかな

(夏)

病む生徒訪ねてゆくや竹の花
夏草に征く兵の汽車送りけり
爆竹や川ある町の夏まつり
この町にはや住み馴れて夏祭
ぬれ縁のところで光る雷雨哉

門前の水にわびしき稲光

雨垂れをきゝわけている蚊帳のうち

人もいね犬もいねしにとぶ螢

明けやすき矢作河原へ砂採りに

朝涼の矢作の沙に腹這へり

(秋)

鳶なくや三河尾張の秋日和

鎌の刃のぬくとくなりし憩ひ哉

へたくそに蝗が泳ぐ小溝かな

軒下の秋陽に出すや牛のくび

人も牛も地曳網ヂビキをひけり秋の晝

潮騒のすゑが澄むなり秋のくれ

(冬)

街に出でて林檎を買はん年の暮
 寂しさや風の街にて蜜柑買ふ
 床屋出て寒くゆくなり暮の街
 かゝはりはなけども樂し暮の街
 枯柳はやかれがれの風の街
 大根の山を背にして兵送る
 驛ひとつ古びて小さし冬鴉
 雲裏の寒き鬩りや肉屋出る
 妻ほしとおもひてゆきぬ冬の垣
 住く人や來る人や衢に妻おもふ
 冬の陽や池あかるきに鯉病める
 大き鯉泥とまがへり冬の池

(石川喜久枝一年忌)

春の川幾すじ越えておまいりに

十五年三月二十五日

鶴折りし手のさゝやかにゆきにけり

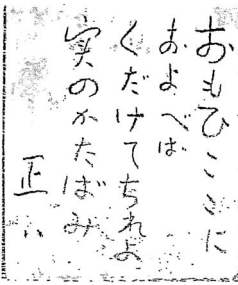
(昭和十五年三月十四日の日記)

当時の教え子に聞く、新美先生はこんな人
 角岡美代子^{みよこ}さん(19回生・大岡町出身)



校庭の池で同級生と(右から2人目が角岡さん)

角岡さんに寄せられた色紙。
 色紙には、南吉の詩がしたためられている。



「広報あんじょう 二〇二二 四一」より

〔俳句注〕

(春)の「五月旅」と「日光路」は昭和十三年五月一〇・一六日の四年生関東修学旅行中の作。この時の画帖「三人道中」に南吉の句「うぐひすの声のまるくやげこん灌」(絵 鈴木進)が書かれている。(夏)の「町の夏まつり」「住み馴れて夏祭」は国鉄安城駅西にある(六角堂前の)本町津島神社の七月の祭である。「矢作河原」と「矢作の沙」の句は、年譜に「昭和十四年七月三〇日学校宿泊訓練二日目、午前四時二〇分起床、自転車で矢作川へ行き砂運びの用意。昼食、水泳の後帰校」とある時の作である。他に「雲の峯や鴉の歩む矢作川」「矢作川を乞食が越しぬ雲の峯」(全集八・五一五)などがある。(秋)の「鶯なくや三河尾張の秋日和」など四句は、昭和十四年十一月八日の農道館稲刈実習時の作である。昭和十二年十二月四日の日記にはすでに「鶯なくや尾張三河は秋日和」(全集十一・二八〇)の句がある。稲刈実習は「安城高女学報 昭和十四年度第三学期」(以下「学報」と略記)の「校内だより」に次のようにある。「稲刈 十一月八日、農道館で終日稲刈をいたしました。秋の空が青く晴れてゐる下で、さくさくといふ鎌の音、私たちは手に肉刺の出来るのも知らず楽しく働かして貰ひました。」「人も牛も」と「潮騒の」二句は南吉が昭和十四年十一月二十三日安城高女職員と伊良湖崎に遊んだ時の連作八句の中にある(全集八・四八四・五)。他に「黒牛に路はままれぬ伊良湖崎」の名句もある(同・五一三)。

菊枯れて車でゆくや島の昼

かそけさやいとなみいとなみに照る秋陽

人も牛も地曳網をひけり秋の昼

いとなみの閑けさや道に芋ほす

藪蔭に雀とをりぬ洩れ秋陽

(新美南吉全集第六巻 詩集 牧書店、一九七三年三月より転載)

(冬)の「鯉病める」と「冬の池」は安城高女の校庭東端にあった池の鯉を詠んだ句である。これが発展して「鯉」の名詩が作られる。

春になって一年忌をむかえた石川喜久枝は昭和十三年四月四日に入學したが、同月十八日から結核のために欠席して翌年三月九日に死去した。「学報昭和十四年度第一学期」にある「石川喜久枝さん逝去」の文に「正覺寺の石川喜久枝さんは永眠されました。(中略)私達は今は喜久枝さんの御魂の安らかに眠られんことを切に祈つてやまない」とある。無署名であるが、担任の新美正八の書いたものであろう。南吉は昭和十五年三月十四日の日記に正覺寺(国鉄岡崎駅西)を訪ねたことを記している。法名は華香尼であることを知り、スケッチブックに「鶴折りし」の句を書いた(全集十二・二二二・一三)。筆者も今年六月八日に「正覺寺の墓(本堂の裏にある)にお参りした。

資料一 秋の歌

南吉短歌「瀧山寺自転車行」にみる少女像

秋陽さす三河の道に輪をつらね遠乗り行かす少女らと吾と 36

自転車遠乗りゆくと少女らときほひてゆけば照りて秋陽 37

9 道のべにむしろに朱梅干してありそこの陽南を息づきすぎぬ 38

- 10 玉ほこの道の埃のしるけども木槿はさけりそこも通りぬ 39
- 11 風ともみさやがぬ畠の唐さびの朱毛かなしみそこも通れり 40
- 12 しましくは街道ぞひのひとつ家に氷かく音をききつゝゆきぬ 41
- 草がくり草はみい鳴く仔の山羊のやさしき音をしまねぶ少女らはも 42
- 遠ゆくと輪をなめてゆく少女らの脛うつ風のかろし秋風 43
- 教へ子の少女らさきにいゆかしめ川渡る吾は下思ふなし 44
- かけ渡す矢作の川の高橋を少女らがわたれば裳ぞひるかへる 45
- 17 虹たゝす噴上みづのかぎろひにうつうつ見れば蛾の舞ひ交る 46
- 18 玉裳なす噴上みづのかぎろひのおりつくなべに白鳥の一つ 47
- 19 息づかひのぼりきつれば天守あとの袖ほどが芝に露しとどおく 48
- 20 朝まだき天守があとの芝草に露しとどなるに手は觸れてある 49
- 21 ゆきゆきて瀧山寺につきにけり樹山をこめてとよもす水音 50
- 八月二十五日
- 22 岩ばしる瀧山寺の寺裏の暗きに見ればしこの面ども 51
- 23 岩山の高みに立てバ風渡る三河八こ八山國らしも 52
- 24 見わたしの近き谷々こめて鳴くかなかなきバ秋たちにけり 53
- 25 谷間の石切場に八人氣なししみゝにいなくその秋蟬 54
- 26 風わたる岩山のほをかけ下り下りに下りついに瀧つ瀬 56

安城高文学報 昭和十三年二学期より

瀧山寺自轉車行

われ〱が出發したのは八月十五日午前七時すぎだつた。一行約二十名で二年生が一番多く、三年生は僅かに二人といふ少なさだつた。附添ひは校長、大村、鈴木の諸先生に僕を加へて四人であつた。

朝からかん〱と陽が照つてゐた。そこで僕が、

自轉車で遠乗りゆくと少女等ときほひてゆけば照りてる秋陽

と詠んだが無論出来の悪い歌といふべきである。

岡崎公園はまだ朝のうちだつたので、樹の影が多くそこを歩くのは涼しかつた。堀に大きな鯉が一ぱいゐて、餌を投げてやると獣のやうに猛烈に奮ひあふので面白かつた。そこには噴水があつたので

玉藻なす噴上げ水のかぎろひておりつくなべに白鳥は一つ

と詠んだがなくもがなの歌といふべきであらう。

伊賀八幡によつてから大樹寺である。こゝはわれ〱を大變歓迎してくれて、立派な美しい部屋々々を見せてくれ寺の來歴などもきかせてくれた。であつた。われ〱は徳川家先祖の墓前で暫し草をむしつてあげたのである。

瀧山寺及びその附近ですこした三時間ばかりの楽しさは、書きたいのだがさういふわけにはいがない。字數に制限があるのだから。

- ②⑦ 吾が前に氷をのまぬ少女らは羞しむらしも吾が若けれバ 57
 ②⑧ 左してゆくべく言ひて少女らのあとゆく吾れ八まだ若き教師 58
 ②⑨ 石とるとやはぎの川に入りたゝしもすそひぢたる乙女兒八よし 59
 30 若せみ八いまぞ生れつる碧るりの翅みづみづしめでたきその翅
 31 玉ばしる川瀬がきしに生れにけむここの秋蟬よきくらくよしも 55

ゆきゆきて瀧山寺につきにけり樹山をこめ
 てとよもす水音
 岩山のたかみに立てば風渡る三河はこは
 山國らしも
 風わたる岩山のほをかけ下り下りに下りつ
 いに瀧つ瀬
 岩ばしる川瀬がきしに生れにけむここの秋
 蟬よ聲のすがしき
 みな瀧山寺を詠んだつもりだけれども具眼
 の土が見るなら、言ひえて妙といふ箇所は全
 然無いだらう。
 かくて吟行曾のはてたのは五時近かつた。
 (新美記)

〔短歌注〕

筆者は今年の十月二十六日に滝山寺自転車行と同じコースを辿って自転車で岡崎公園、伊賀八幡宮、大樹寺そして滝山寺を訪ねた。それは22の「しこの面ども」の実物を確めるためであり、また23の「三河八ここ八山國らしも」の風景を自分の眼で見るためであった。瀧山寺東照宮と天台宗瀧山寺は一つの境内にあつて神仏習合である。最後に宝物館で「しこの面ども」の「祖母面・孫面・祖父面」に対面した時の喜びは言葉に表すことができない。大樹寺から滝山寺までの坂道は意外に遠くて21の「ゆきゆきて瀧山寺につきにけり」の実感を味うことができた。南吉俳句に「行き行けど」ともある。「ゆきゆきて」「は」「どんどん行く」の意で、蕪村の句に「行々てこゝに行々夏野かな」がある(新潮日本古典集成一〇二頁、岩波文庫七三頁)。南吉は昭和十二年二月三日の日記に「昨夜蕪村句集を讀み了る。」(全集十一・一二五)と書いているから、「ゆきゆきて」の歌話は蕪村によるであろう。この言葉の由来は古くて中国の『文選』の「古詩一九首其一」には「行行重行行与君生別離」行き行きて重ねて行き行く、君と生きながら



「瀧山寺の寺宝」より

別離す。」とある(新書漢文大系19、明治書院、一二八頁)。「万葉十一・二三九五」に「行行(ゆきゆき)て逢はぬ妹ゆえひさかたの天の露霜ぬれにけるかも」(人麻呂集)とある。

南吉は滝山寺自転車行の短歌で色々な万葉語を用いている。10の「玉ほこの」は道にかかる枕詞である。12の「しましくは」は「しばらく、少しの間」の意で「万葉二・二九」には「芳野河行く瀬の早みしましくも淀む事無く在りこせむかも」とある。18の「玉裳なす」は美しい藻のように「浮ぶ」「寄る」「なびく」にかかる。「万葉一・五〇」には「ものふの八十字治川に玉藻なす浮べ流せれ」とある。22の「岩ばしる」は「石の上を激しく流れる」の意で「万葉八・一四一八」に「石ばしる垂水の上のさわらびの萌え出する春になりにはるかも」の名歌がある。25の「ししみに」は「おびたたく」「すきまなく」の意である。こ

のように若い南吉が古語を自在に使いこなしていることは注目すべきことである。自転車による吟行会には佐治校長、大村、鈴木の前先生も参加されたが、先生方の詠草は知られていないので今後の課題にしたい。

資料三 南吉詩の四季

はじめに

生れいでて

舞ふ蝸牛デムシの

触角のごと

しづくの音に

驚かむ

風の光に

ほめくべし

花も匂はゞ

酔ひしれむ

一年詩集の序（昭十四・二・一）

〔春の部〕

四月のあさの

四月の

あさの

しののめの
月へ

ひばりが

のぼるなら

のらは

いちめん

れんげさう

やんれ

いちめん

れんげさう

（昭十四・四・十五）

垣根

垣根も四月はまだ子供で丈がわたしのバンドにとどかない。ゆくときわたしが葉をさわると子供の子供の耳のやうに柔い。耳をひつばられた子供のやうに垣根はするとくすくす笑つて隠してゐた蝶をはなすのです。青い空へはなすのです。

（昭十四・四・十五）

五月の星は

五月の星は林檎酒シードルの泡を吹き
蛙の歌手達の咽喉どをつるほす

(昭十四・五・十三)

五月の太陽

五月の朝の太陽は
晴着はれぬぎをもたぬ雀すずめに

金のころもをかしてやる

(昭十四・五・十五)

逝く春の賦

いまだ住みつかぬ村に
見しらぬ児こちと
遊ぶはさみしや
たそがるゝ
わが窓にきて
匂ひすみれの花びらなど

もてあそびつつ

たぬしげにたはぶれてあれど

やがて夕闇ふかうなれば

それぞれにわが家の

灯のもとに帰りゆけり

さあれ われはいづちゆかむ

わが魂の帰るかたありや

見しらぬ児ら残しゆける

金平糖こんぺいとう一つ

たなそこへのせ うちゆすり

かちかち鳴るをきゝてあれば

われはさみしや

われは大人はげにもさみしや

(昭十四・五・五)

流れに寄せる

花うけて

ゆくみづは

れんげの原を

めぐりゆき

新芽のかほる

松林のかげ

通るべしや

山羊つれて

たゞずめる

脛細き少女の傍も

すべしや

はるばると

おもひのごとく

ゆくならば

やがては 春の

夕茜

花も見わかず

なるべしや

(昭十四・五・十五)

生徒詩集第四集「麥笛」(一九三九年五月)掲載作品

お伽噺

春になると神様は御掌をひらいて

鶯をはなつてやるのです

鶯は田舎にとんでいつて

手近なところからはじめます

まづ松林のよるこびを

うたつてやる

松たちは満々として

黙つてる

小さい池のかなしみも

うたつてやる

池は感謝して

黙つてる

土堤の草たちのぐちも

うたつてやる

草たちはこれ以上望まぬと
黙つてゐる

一人でゆく雲のさみしさも
うたつてやる

雲はとききをついて
黙つてゐる

小川のくだらぬ訴へも
うたつてやる

小川はびつくりして
(しばらく) 黙つてゐる

牛と百姓のつゝましいねがひも
うたつてやる

牛と百姓は立ちどまつて
黙つてゐる

傾いた家の古い憂愁も
うたつてやる

古い家は身うごきも
せず黙つてゐる

澄んだ泉の美しいのぞみも
うたつてやる

泉はうれしくて
黙つてゐる

そのうち日暮がやつて来る
鶯はぐつたり疲れます

夜になると神様はしげみの中に
鶯をしまふのです

それから別の御掌をひらいて
月夜をはなつてやるのです

(昭十五・二・十一)

〔夏の部〕

初夏抒情

麦の穂

黄ばみ

土蔵の白壁に

まひるはまぶしい

君よ 君の少年を

探すなら

しほれた帽子ソフトをぬぎたまへ

麦笛を吹いて

この小径こみちをゆきたまへ

(昭十四・五・十五)

青梨

夏のはじめの

梨ばたけ

指さきほどの

青いなし

少女よ

お前はまた熟れぬ

お前の乳房はまだかたい

夏のはじめの

青い梨

(昭十四・五・十五)

若竹

うるはしや

若竹

みどり あつめ

ひとすじに 噴きあげ

あさ風に

ますぐに 噴きあげ

たかく ほそく

うれ かそかに 噴きあげ

(昭十四・五・二三)

初夏

小川に
水の来そめる日は
野の末に
鳴く音の蛙

水すまし
すゞしく
流れ

杳はるびきこと
おもふがうれしさ

夜は
蛩さへ
ともし

(昭十四・六・二二)

宿

若竹の 藪をまはると
ほら 見えて来た
この細い道に面した
小さい窓

鉄の格子に
擦硝子の窓障子
季節をすぎた匂ひすみれの
鉢もある

ほら こだ 僕の栖すみかは
ほら こだ 夜と、苦しみの
栖は

出来ることなら
知らない旅人のやうに僕は
ここをすぎてゆきたいのだ
何処か 遠くの
新しいくにへゆきたいのだ

(昭十四・六・二二)

線香花火

垣根のそばに

おちてゐる

線香花火の

もえのこり

ゆふべあの子と

ここに来て

ともして遊んだ

あの花火

夜なかに 雨が

ふつたのよ

色がにじんで

ぬれてゐる

学校にゆくみち

見て通る

何かかなしい
もえのこり

ゆふべ しらずに

ゐたけれど

垣根に茱萸くぐみも

咲いてゐる

(昭十四・五・六)

〔秋の部〕

泉 A

ある日ふと

泉が湧いた

わたしの心の

落葉の下に

x

蜂が来て

針とぐほどの

小さな泉

x

しやうもなくて

花をうかべて

ながめてゐた

(昭十四・十・十五)

秋陽

秋陽は

ひとりが

好きなのか

誰もゐない

部屋に

窓からこつそり

はいつて来て

椅子のうしろを

あたゝめてゐる

(昭十三・九・二八)

秋抒情

なかに怒りてとぶ蜂ぞ

乾草ほこほこかほり

子供ら豆の葉鳴らし

秋陽は酒のいるにして

しづかになごむまひるどき

なにの傷みにたへかねて

ひとつを怒りとぶ蜂ぞ

金にかすみて失せにける

(昭十七・十一・二二)

「安城高女学報 昭和十七年度第二学期」掲載

秋風之賦

星と

潮と

草むらに

緑のらむぶ

つけしは誰ぞや

さわたる 秋の
風ならで

(昭十三・八・十八)

タぐれ秋さめの

タぐれ秋さめのなかを

かへつて来た

新しい紺がすりに着換へて

窓のところに坐る

こまかく秋さめの降るタぐれは

まだ窓に明るい

向ひの家の窓もあいてる

はやくともつた電燈の下で

おかみさんが手藝をしてゐる

しめやかな滴の音ばかりで

この世はなんと美しいことか

こんなとき蝸牛は

遊ぶにちがひない

夕飯をよぶそのあたりの

百姓家の垣根で

あ、どこかで魚を焼いてる

あまり静かな幸福さだから

たばこにそつと火をつけよう

(昭十四・十・三)

梨

小川の底を梨が

ころがつて来た

吉沢梨園からか

もつと川上の今村あたりの

梨畑からか

螟虫駆除につかれて

小さいどんどんのそばに

かがんでゐると

冷たい水の底を

丸いのがころがつて来た

ころころところがつて

海の方へ行つてしまつた

海までは遠いから

途中で月夜になつてしまふだらう

月夜になれば草に虫が鳴き、

秋草に露が光るだらう

どこかの村には

祭も近くて笛太鼓が

鳴つてるだらう

梨は一ひら二ひらの雲の下を

水底にうつる影とともに

ころころところがつて

行くだらう

(昭十七・十・五)

秋日詠和抄

一筋の草も軍馬の養ひぞたゆまず刈らむ朝の堤に(勤労

奉仕)

三年 石川 恒子

つはものゝ銃とるころろ大地に力のかぎり鎌ふり下ろす

(全)

三年 大見 和子

此の一日なすべきことをなし終へて床に手足を伸ばす樂

しさ(全)

三年 清水 雪江

とく起きて服着るひまも急がれぬ吾れ待つといふ子等を

思へば(託兒所奉仕)

三年 田淵穂野子

草の中萩の花のみ白く咲き月夜の風に觸られてゐる

四年 本田 美智

歩みきて疲れしまゝに秋草のみだれ咲きたるなかにかが

みぬ

四年 太田 敏子

安らかに生きてゐませと祈りつつ蓮の葉船をわが押し流

す(盆)

四年 中川 彰子

川を下る蓮の葉船や祖父・祖母・母乗りあますとわが眼

に見ゆる(全)

四年 山口千津子

すべなくてをぐらき道を踏み行くとはや吹きくるは秋の

風なり

四年 大村ひろ子

秋雨ははや行きすぎぬ白萩の地に散りしきてただ白きま

ゝ
雨のあとしつとりぬれた鶏頭の眞上に白い雲が流れる

四年 神谷 愛子

秋あつき日をひねもすに螟虫探すあをき稲田は想ふ事な

し

四年 佐治 孝子

秋口の螢となつて吹かれけり
草の花ぬれて開けり芝植つる

正 八
无 平

「安城高女学報 昭和十六年度第二学期」掲載

〔冬の部〕

木

木はさびしい

木は老人の手のやうな幹を
冬陽にてらされながら

はてもなく淋しい

ある日ふと私は

木のさびしさにふれた

ああ、

さうぎつしい生活の中から

歩いて来て

木の幹をなでたとき

私の掌に

それが伝つて来た

木のさびしさはあつたかかつた

向うに白い雲も見えて

(昭十四・十一・二二)

仲はづれの

仲はづれの

小さい子が

じぶんのうちの

背戸口で

貝殻笛を吹くやうに

私は

げんじつを逃げて来て

こころの裏口で

詩をあそぶ

(昭十四・十二・二九)

藪

月夜の
藪に石なげろ
寒い狐が
こんとなく

(昭十四・十二・十三)

冬 B

こころの旅のいや果に
あはれ触れくる薄陽よ
自づからなる唄もたえ
野末を冬のごゑばかり

(昭十四・十二・十五)

氷雨

氷雨が 村を
濡らして すぎ
北に 雲は

象牙のやうに

光る

野を来る風が

刃物のやうに

鋭くなつたこんな

日暮だ

わたしの祖父たちは

はらいそは杳いと

西の空のあかね

洋燈を 研いだ

(昭十五・二・二七)

冬の朝

病癒えて

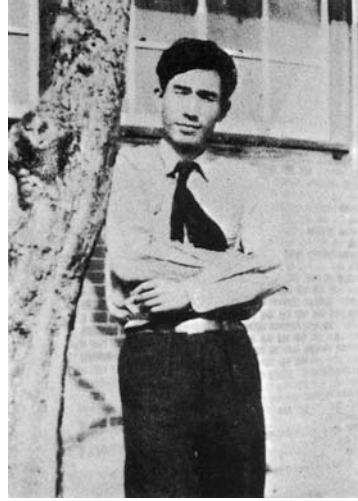
あの子が

來るといふ朝は

さあ みんな

教室の花をかへよう

しぼんだ菊は棄てゝ



詩に熱中したころ。

新美南吉全集 6、詩集 牧書店
(1997年)より転載

白とピンクの冬ばらを
持つといで
みんなあの子の寢れを
いつてはいけない
いたわつてやれ
窓ぎわの
日なたの場所に
あの子の席も
移しておかうよ

(昭十四・二・二四)

鯉

大きい鯉である
天鷲^{ヒノドリ}絨のやうなみどりの
みづあかの上にどんより
しづんでゐる
からだにはたくさんきずの古傷痕が
白くふやけ、
ぜんたいを かびのごときものが
おほつてゐる
尾は 千百の戦場をかけめぐつて
きた軍旗のやう
ちぎれちぎれで
よく見ると古綿のごときものが
ぶらさがつてゐる
ガラス玉より生気のもしい眼は
外も見てゐない 内も見てゐない
かつて漁夫のはだかの胸を
はりたほし
落下する五丈の瀑布に

反抗し 征服した

あの力はどうしたか

一切はむなしかつた

夢想することも 意志することも

いかり、あらがひ

ひねくれることも

ああ一切がむなしかつた

この虚脱虚無のそこに

かじかんだ冬のひざしを

かすかにつけ

そとをゆく砂塵の音に

きゝいり

泥のやうな いのちが

やがて泥に帰するときを

まつてゐる

(昭十五・二・三)

冬 C

樹がねじくれ、

道の背ほねが白い。

いつても、いつても、河床かわとこのはだかに

鳥の死がいや

茶わんのかげら。

風がびゅつびゅつと

ふきならし、

まんとをまとい、

手ぶくろをはめても

さむい。

ああ、またこんな

こころの季節になった。

(昭十五・一・十三)

冬の最後の日暮に

冬の最後の日暮に

南の窓で

みそさゞいの話した白海豹あひすいの物語を
読んで

光がともしくなつて

小さい文字達が消える

私は北の海から

帰つて来る

ああ 窓外の冬木のうれに

真赤に燃えてる

炎のやうに燃えてる

たつた一つの雲よ

あしたから春になるといふ

貧しい私の生活も

暦のやうに革あたらまれ

(昭十五・二・十一)

ぷりむらの

そば吹くときは

かぜもあかるく

うれしさう

(昭十七・三)

資料四 南吉詩のと新田の人々()

入 日

穂麥の前の

少女が

わたしの方に手をあげた

わたしを招よんだと思つたら

さうぢやなかつた わたしの

ずつと背ろのもう一人の少女をよんだのだ

穂麥の前の

少女が

それから急にうつむいた

わたしにはにかむのだと思つたら

わたしのずつとうしろの

金の入日がまぶしかつたのだ

厩の匂ふくれの徑

わたしは疲れて歩いてゐた

(昭十四・五・五)

桑畑の灯

桑の若葉の

畑のどこかに

夜になると

小さい 灯がともる

絲くる やさしい

姥と

眼の大きい唾の娘と

紅い脚の鳩が

むつみあひ

しづかに うつくしく

生きてゐる

わたしのころは

さすらいひじ
漂泊人

疲れたあしで

昨日も今日も

あかり
灯のありどを

たづねてゐる

(昭十四・五・十五)

南吉詩の和新田の人々()

綿の話

火をくべてくれる婆さんから

綿の話をきいた

私はあつたかい五右工門風呂に

ひたりながら竈の外へ火がちろりちろりと

出るのを見ながらきいた

こんげにすふばかりになつちや

困るといふことから話ははじまつた

わしらが娘だつた時分にや

どこの家でも綿をつくつたといつた

五月時分に種をまいて、

夏じと中育ねて

九月頃ええ熟ませるだといつた

木は二尺位あるだ

胡麻位はあるだといつた

實は樁の實に似てをつて

一本に十もついてゐる

それがぼつぼとはげて

あつちにもこつちにも眞白に

熟えんでゐるだといつた

その實をとつて、筵はにひろげて乾ほいて

絲いとに紡いで織は機たで織るのが

わしら若い時分の冬中の仕事だつたといつた

春になるとそれを賣つたといつた

いつかそんなことをしなくなつてしまつたといつた

織は機たも壊して

縁側を作るのに使つてしまつた家が
多いといつた

こないだどこかの弘法さんで

絲車を買つて來さした人が

あつた、

まだあんなものが賣つてをるだわいと
思つたといつた

家で織つた木綿は丈夫だ

まだ昔の木綿がふとんの裏に

残つてをるだが、

あんなものは股引のつぎにあてよか

なんていつとつたといつた

翅の弱つたこぼろぎが土間の隅で

絶え絶えに鳴いてゐる夜に

婆さんから綿の話をきくのは

聞くさへあたたかに懐しい

(昭十四・十一・十四)

百姓(一)

夕やみのなかにあしおとがして来た

たれかゞ走つて来た。

ものすごいいきほひで走つて来た。

たれかと思つたら、ついさつき

行きあつた百姓だつた。

百姓は何か急用ができたのだ、

それで牛車をほつといて走つて来たのだ。

「おゝ、あつた！ よかつた！」

彼は私の二、三間むかうで何かを拾つた。

何を拾つたんだろう。

夕やみでよく見えなかつたが、

たしかにそれは肥料びしやくであつた。

「おゝ、あつた！ よかつた！」と

息を切らして走つて来た百姓がひろつたのは、

それはいつぼんの肥料びしやくであつた。

(昭十七・六・二二)

百姓(二)

年とつた百姓が古い車をひいて来た。

それははばのせまい、まはりの大きい輪をもつた

古い古い じつに古い荷車であつた。

こんな古い車をひきだすのがまちがひのもとなのだ。

それに雨上りで、道には石がでこぼこしてゐた。

たうとう私のそばで一つの輪がこはれてしまつた。

輪がねだけのこつて、木がばらばらになつてしまつた。

「これは弱つた」と百姓がいつた。

「こいつはどうも」と私がいつた。

私は手をだしかけたがまたひつこめた

「どつしよもなかつたので。」

百姓はばらばらになつた木片をあつめ

輪をくみはじめた。

「こりやわるかつた」と私がいつた。

「こりや何とかならぬか」と百姓がいつた。

じつに何ともならなかつた

「しかし百姓は輪をしくまうとしつづけた。

私はいつまでも百姓とあるわけにはいかなかつた、

「學校に遅刻するので。」

私は學校へいつてしまつた

「百姓とこはれた輪をのこして、

「じつに愚直な、はらだたしいばかりに愚直な

ものどもを朝の路上にのこして。

(昭十七・六・二二)

資料五 結び

泉 B

この泉の水を汲んでくれ

これはさゝやかな泉だ

恰度茶わんに一ぱいほどの水だ

だが見てくれ

この水は清冽で

ま新しいのだ

無限の青空が

そのはりつめた方寸のおもてに

くつきりうつつてゐるではないか

しんと動かないが

耳を近づけてきいてくれ

その底にしんしんと

力のみなぎるつばやきが

聞えるではないか

この泉は四方の大きい岩を

じみじみと永い日夜をかけて
絶えずしみとほつて来た水が

一切の汚辱を去り、

みぢんのにこりもとどめず

今朝ここに充ちたものだ

見てくれ、底の砂粒の一つ一つが

寶石のやうにきらきらしてゐる

塵一つ、枯葉の片か一つ

沈んではぬない

もつと頬をその表面に近づけて

見てくれ

氷のやうな息吹が

泉からたちのぼる冷気が

君の感覚をさしはしないか

さあ

この泉を汲んでくれ

もろ手を出してすくつてくれ

(昭十五・六・八)

先生

窓から首を出して居られる

先生

筆を止めてガラス越しに

見ると

先生のお顔が黄く光つて

見える

まぶしさうに目を細くして

何を見て居られるのか

考へて居られるのか

うれしさうなお顔。

「縁側の針 一年第二詩集・十四年三月」より

杉浦 さち

〔詩注〕

「はじめに」は南吉がガリ版刷りで作成した生徒詩集「雪とひばり・一年生第一詩集」（昭和十四年二月）の序詩である。結びに引いた杉浦さちの詩「先生」は「縁側の針・一年第二詩集」（十四年三月）の十一番目にある。杉浦（現姓・尾頭）は「詩の時間、生徒に課題を出してしまつた後の四、五〇分は意外に先生にとつて解放された時間だったのではないだろうか」と語っている。（大野秋紅「新美南吉ノート」十六頁）

（春の部）：「お伽噺」は詩作についての寓意詩。「手近なところからはじめます」とあるように、安城高女周辺にある松林、池、土堤、小川などが歌われる。詩人の言葉によつて事物は存在して満足し、沈黙する。昭和十五年五月八日の日記に「言葉がないといふことはその物が存在しないことを意味する」とある。（全集十一・三四）

（夏の部）「宿」新田の下宿は「苦しみの栖」。巽聖歌は『墓碑銘』で「苦しみの栖」の表題の下に新田周辺に取材した詩篇をまとめている。「線香花火」南吉は花火好きで詩「花火」に「さてもおむろにとり出した一束の線香花火」ともある。『見聞録』昭和十六年七月二十四日「青田のふちで花火をともした。（略）火のついたばかりのを落とすと、緑の草の中で一ときもえ美しかった。」（全集十一・四三六）とある。大村ひろ子の「新美先生と安城新田」の中には次のようにある。「その夜先生は十歳位の少年のグループとそばの青田のふちにしゃがみ込み、線香花火をしておられました。時々先生の横顔がぱつと青白く浮かび上ります。何やら子供達に『うん。うん。』と答えておられる様子です。」（校定全集第三巻月報）

（秋の部）「泉（A）」は詩作についての詩「泉（B）」を参照。「花をうかべて」は北川幸比古編『新美南吉詩集 花をうかべて』の題名になっている。「秋陽」は昭和十三年九月二十八日の作で放課後の教室の様子である。この日に八篇の詩が制作された。その順は「薔薇の」「朝は」「曇日」「花」「そこにかぐんで」（これまでは午前の詩）「秋

陽「落葉」「硝子ノ歪ミ」(の三篇は午後の詩)である。南吉の安城高女内での一日の生活が歌われている。・「秋抒情」昭和十七年九月三日の日記に「何にかれる蜂ぞ、酒色のまひるの秋陽の中を。」とあるが(全集十二・三八四)、これが発展して「秋抒情」の詩が制作された。この詩には「怒り」の語が二回あるが、この年の学則改正で南吉担当の三、四年の英語が廃止されたことも背景にある。この詩と昭和十三年の「秋風之賦」の安らかさとは対照的である。・「秋日詠和抄」は生徒の短歌十二首と正八(南吉)、元平(戸田紋平)の俳句から成っている。三年生の奉仕作業の歌は時代の要請に生きる姿を歌っている。南吉担任の七名八首は日常にみられる自然の風物詠である。その終りは「螟虫探す」の農作業の歌でしめくられている。

(冬の部)「木」は南吉が安城高女の校庭でよく来た所を歌っている。「落葉」の詩にも「私が烏臼ノ下ヲノユクト」とある。南校舎の前に十本ほどの烏臼の木があったと記憶している。「朝礼のたびに」(略)南吉は、いつも烏臼の木の下にたたずんで、空などを、どことなく見上げているのが常だった。やがて、やあらボケツトから手帳をとり出して、何やら書き始める。『あ、先生またひとつ詩ができたらしいな』と思つてほつとする。『かつおきんや』(こんぎつね)をつくつた新美南吉『一七三・四頁)・「鯉」俳句に「冬の陽や池あかるきに鯉病める」「大き鯉泥とまがへり冬の池」とある。この鯉の一生を巧みな比喻によつて表現した思想詩である。南吉が校庭の中でよく来たもう一つの場所は東端の池であつた。「この池のまわりには、桜や桃をはじめ、緑ゆたかな木々がこんもりとしげつていて、(略)南吉先生もしょつちゅうここに来てみえました。」(かつおきんや前掲書、一六一頁)しかし南吉は病む鯉の「外も見つてぬい 内も見つてぬい」という死の相を見つめて「やがて泥に帰するときをノまつてゐる」生きものの宿命を歌っている。・「冬 C」も死の実相をメタファーで描く詩である。「道の背ばねが白い」は「背ばねのように白い道」また「河床かはたのはだかに」は「はだかのような河床に」の隠喩である。「鳥の死がい」や「茶わんのかから」の事物も



左から山崎校長 佐治前校長 南吉 鈴木先生
『安城の新美南吉』による(45頁)

がみられる。「桑畑の灯」には姥と唾の娘と鳩が静かに美しく生きている小さな世界と、「灯のありどをノたつねてゐる」「漂泊人」の詩人が対比されている。・「綿の話」は汝と我との対話である。「婆さん」は南吉が昭和十四年四月から下宿した(安城町大字安城字出郷・現安城市新田町出郷)大見坂四郎の妻である。「こんげにすふばかりになつちや」の「すふ」は人造絹糸のこと。「どこかの弘法さんで」は知立市にある真言宗遍照院の大師命日の縁日には多く

死を描くメタファーになる。冬の詩全体が詩人の「こころの季節」を歌っている。・「氷雨」雲は「象牙のやうに」「風が」「刃物のやうに」の直喩から研師の祖父たちは「西の空のあかねノ洋燈を研いだ」の隠喩で詩は結ばれる。「はらいそ」はキリシタン用語の「パライソ」で天国、楽園である。南吉がよく読んでいた北原白秋の『邪宗門』『外光と印象』に入りの壁「ほのかに重(くゆ)る沈の香、波四維葺増(パライソ)の夢」とある。日本思想大系25(岩波書店)の『キリシタン書・排耶書』の「病者を扶くる心得」に、「其後科なくして死せば、障りなくばらいそノ快樂に至るべし。」(八五頁)とあり、「妙貞問答下巻」にも「後世ノ善所八パライソト云イテ天ニアリ」(一六四頁)とある。他方「破吉利丹」(鈴木正三著)にも「善業の者をば、はらいぞうとて、楽み尽ぬ世界を作置て、是へつかはし給ふ。」(四五三頁)とある。

(南吉詩と新田の人々)には「南吉のユートピア」(浜野卓也)の詩篇を選んだ。ここには「庶民への共感」と「土につながった郷土の生活」

の人でにぎわう。『百姓(一)(二)』の制作は民話的メルヘン『おぢいさんのランプ』、『牛をつないだ樫の木』、『和太郎さんと牛』などと時期が重なっている。

(結び)「泉 B」は泉の水のメタファーによって詩の成立と作品へ読者を誘うことを歌っている。詩作が宗教に接近することは道元の文章と比べれば分る。「無限の青空が／そのはりつめた方寸のおもてに／くつきりうつつてゐるではないか」と『正法眼蔵』の「現成公案(水野弥穂子校注、岩波文庫、五六頁)の次の文章を比べてみる。「人のさとりをうる、水に月のやどるがごとし。月ぬれず、水やぶれず。ひろくおほきなるひかりにてあれど、尺寸の水にやどり、全月も弥天(注・天全体)も、くさの露にもやどり、一滴の水にもやどる。さとりの人をやぶらざる事、月の水をつがたざるがごとし。」この文章は南吉の無限の青空が方寸の水の面に映ることの詩的眞実をみごとに解いてくれる。道元は言葉に表しにくい「さとり」を月の光が尺寸の水にやどるという比喩で語っていることが注目される。南吉は詩作と作品の生成を次のように語る。「この泉は四方の大きい岩を／じみじみと永い日夜をかけて／…／一切の汚辱を去り／みぢんのに／こりもとどめず／今朝ここに充ちたものだ／…底の砂粒の一つ一つが／…きらきらしてゐる」この忍耐強い詩作からうまれる作品について伝詩人ポール・ヴァレリの詩集『魅惑』の最後にある「棕櫚」(中井久夫訳、みすず書房、一六七・七三頁)には次のように歌われている。「ただに耐へよ、／碧空のもとに耐へよ！／沈黙の粒の一つ一つが／熟れた実となる機会である」詩作品を享ける読み手についてヴァレリは「人は今雪崩打つ、／…／青空から落ちる実に／のたうつ民に塵は舞ひ立つ」と語っている。ところが南吉は詩の読み手と同じ目線に立つて語りかける。「泉からたちのぼる冷気が／君の感覚をさしはしないか／さあ／この泉を汲んでくれ／もろ手を出してすくつてくれ」このように「泉 B」は道元の宗教的眞理とヴァレリの詩作品の生成にも迫りうる作品である。

『徒然草』の第十九段には「折節をりふしの移り変わるこそ、ものごとにあはれなれ。」（岩波文庫、四四頁）とあります。（今泉忠義訳「季節の移りかはるのは、何ごとにつけても趣の深いものだ。」角川文庫、一六三頁）これが万葉集以来の日本人の美意識の基本でありましょう。歴博のエントランスホールを飾る加藤孝さんの陶画の題も「四季輪廻」でありまして、下から春夏秋冬の風景が描かれています。南吉詩歌においても四季の移り変りが、安城の風物のなかに歌われました。南吉詩によって戦中でも変ることのなかった故郷の自然が蘇ってきます。寺の鐘を献納することが主題になっている『ごんごろ鐘』（昭和十七年三月作）の終りに、御堂のうらにある白樺の葉が春の光を反射している美しい描写があります。そして「いつかお父さんが、日本ほど自然の美にめぐまれている国はないとおっしゃったが、ほんとうにそうだと思う。」（大全・一二四頁）とあります。南吉詩において私たちも四季の移り変りのなかに自然の美を再発見することができます。

安城高女十九回生の加藤千津子（旧姓、山口）さんに、新美先生の作文の時間は作文、詩、短歌、俳句を書く時間であったと教えていただきました。先に読みました「秋日詠和抄」に「蓮の葉船」の歌が二首載っています中川彰子（現姓・清）さんには「女学校時代の新美先生注4」という文章がありまして次のように書いておられます。

ささやかな言葉のはしにさえ、その奥にひそむものを、深くほりさげて味わうことを、一コマ／＼の授業の積み重ねの中で、おぼえていったようだ。ささいな、つまらぬものも、彼の目を通り、心を通りぬけると、それはうたになることを知り、美に昇華することを知るようになった。このことはいつまでも心の中に巣くって、人生の旅路の杖になってくれることと思われる。（中略）そのまま通りすぎてしまいそうな日々であるけれど、先生が生きてゆかれたように、小さい平凡な事物の中に、心をつつしこめて、大切に生きたいと念じている。

中川さんは同級生のだれの胸にも「先生ののこされた言葉の切れはしが大切にしまわれて」おり、ひとりひとりが

い・の・ち・について思いをひそめたとも記しています。十九回生のみなさんは新美先生から詩文の作り方を通して生きる術すべをも学ばれたのです。それを「人生の旅路の杖」と表現されました。そこで、「秋日詠和抄」を読み返してみますと、生徒たちは日常の奉仕作業や自然の事物と和して歌っていることが知られます。こうして新美先生は四年間の作文教育の成果を家庭連絡誌を通して父兄に伝えられました。十二首の短歌が載りました。安城高女学報 昭和十六年度第二学期」には校長の依田百三郎先生の「和する心」という文章があります。その中で「日本人が富士登山をするのは富士山を征服するのではない。(略)日本人にとって神も自然も人間の友であり、味方であって対立的存在ではない」と語っておられます。これは昔も今も変わらない真理でありましょう。

今年安城市内のだこの町内掲示板にも「南吉が青春を過ごしたまち安城」のポスターを見ることができました。あの写真は十九回生五十四名の卒業記念写真であります。その時より一カ月ほど前のことを写真の中のお一人である大村博子さんは次のように歌われています。

命終を覚悟なされし先生と和して歌いきアロハ・オエをば注5

この時は下級生たちにも印象深いものでした。大村さんの妹さんの山崎たか子さん(二十一回生、当時二年生)の回想に「何かの会の時、講堂の舞台で姉のクラス全員と前列左端にいた先生が『アロハオエ』をうたったことを思い出します注6。」とあります。一年生の岩瀬澄子(旧姓・石黒)さんは「卒業前の予餞会(学芸会のようなもの)で、先生が一番前の列で大きな口をあけて一生懸命に合唱をしておられた顔が、今でも目に浮かびます注7。」と語り、同じく一年生の渡辺とし(旧姓、山口)さんも「予餞会で担任の方達と一緒に歌われた『アロハオエ』はとつてもすてきでした注8。」と話しています。南吉詩の「合唱」には「私八少女達ノコーラスノナカニノ花束ノヤウナ心ヲ抱イテ立ツテオハル」とありますが、それが最後に全校生徒の前で実現しました。



19回生卒業記念 昭和17年3月17日 前列中央 南吉
『安城の新美南吉』(45頁)より転載

南吉先生は徐々に病に冒されながらもユーモアを失われませんでした。昭和十七年七月一日の日記には次のようにあります。「上條の浄玄寺の託児所に行ったら、大見迪江が、これムツソリーニに似てゐませんかといつておでこの男の子をつれて来た。はなをかんでやつたら泣き出しさうになった。」(全集十二・三八一)そして七月十日には南吉文学のライトモチーフとも言える文がつづられています。

よのつねの喜びかなしみのかなたに、ひとしれぬ美しいもののあるを知つてゐるかなしみ。そのかなしみを生涯つたいつづけた。(同・三八四)

選者別特選・入選(一般)

後藤 紘 選

特 選

7 若き日に薔薇を摘めよと説く師あり君よ恐るな棘の痛みを

緑町 森 永 政 雄

逆説のような一首の構成は極めて巧みで高度な技法で構成されていて良歌に仕上げられた。一見逆に理解されがちだが、作者の視点は

確かで読む者を納得させる。

31 託児所の奉仕につとむ教え子を浄玄寺へと訪ねゆきたり

小川町 石川 勝治

とても美しい過去をじっくりと詠まれて読者の心を癒してくれる。当然のような子弟への心はやや単純だが作者の心持が直に伝わってくる。身も心も澄んでいるから生まれる作品であろう。

43 吾子三人読み継ぎし絵本を捨てよつか染みと破れが捨てると言つ

里町 内川 愛

こういうなつかしさは誰もが持っているが、どんどん貴重な経験になって行くのも事実である。自分のまわりの状況を的確に捉えていて、心があたたかくほっとしてくる良歌である。

選者作品

はにかみて寿退社告ぐる乙女大きな身体に若さみなぎる
孵化直後残る卵の捨てられむ一羽のみ育つペンギンの世界

注9

〔注解〕

1 南吉のふるさと「半田」新美南吉顕彰会作製の南吉案内。

2 『安城の新美南吉』（発行一九九九年一〇月一日、編集「新美南吉に親しむ会」）

3 かつおきんや著『ごんぎつね』をつくった新美南吉・人間新美南吉・ゆまに書房、一九九八年六月二十五日、初版第一刷、一六一頁。

- 4 「新美南吉童話全集、付録 3」昭和三十五年七月十一日初版発行、昭和四十八年九月三十日、二十一版発行、七頁。
- 5 大村博子歌集『鳳凰山麓』不識書院、一九九七年一月三〇日発行、一二〇頁。
- 6 『安城の新美南吉』七三頁。
- 7 前掲書七五頁。
- 8 前掲書七九頁。
- 9 「第二十四回市民文芸まつり作品集」第二十四号（平成二十四年十一月十七日発行、編集安城市教育委員会生涯学習課、六一二頁）

〔作品の引用と略記〕

南吉詩歌の引用は『校定新美南吉全集第八巻』（大日本図書、一九八一年一月三一日）と谷悦子編『新美南吉詩集』（角川春樹事務所、二〇〇六年一月一八日）に依る。その他の引用は『校定新美南吉全集』からは「全集」と略記して巻数と頁数を示す。鳥越信編『新美南吉童話大全』（講談社）からの引用は「大全」と略記して頁数を記した。

（平成二十四年十二月二十一日）

新美南吉生誕百年（平成二十五年七月三十日）を記念して